日本協会だより

10月度常務理事会

日時　平成6年10月22日(土)
　　　10時40分～16時30分
場所　代々木体育館会議室
出席　中澤専務理事、松本監事、
　　　常務理事5名

一、広島アジア大会について
　男女共第2位になった試合結果が報告される。次回タイでの大会について、タイがAHFに加盟していないことに日本協会が働きかけの必要があるとの意見が出された。

二、アジア第3位決定戦と日本リーグ日程
　ナショナルチームは12月14日から19日まで埼玉で強化合宿を行い、12月20日にアジア第3位決定戦開催地フランスへ出発。選手団編成について、役員2名、コーチ3名、ドクター1名、選手16名、以上総勢22名を派遣する。12月30日に試合が行われる。
　この間の日本リーグ日程変更について、調整が進んでいることが報告された。

三、男子ジュニア・アジア選手権記者発表が行われたことが報告された。

四、アトランタ（アメリカ）の招待について
　来年2月10日より20日（予定）まで男女ナショナルチームが参加することで推進する。

五、アトランタ・アジア女子予選について
　1月から3月の間に行うことは決められているが、ジュニア・アジア予選、国内スケジュールなどを踏まえ日程を検討していくことになった。

六、全日本総合大会について
　従来5万円の参加費を10万円に増額の案に関して、本年度は7万5千円とすることとした。
　参加チームの役員登録について、4名を6名にする。
　日本協会推薦枠に関して、クラブ大会から1位のチームと日本リーグより昨年の7位のチームを推薦する。

七、個人登録について
　登録管理の強化と正確な実態を把握するため、コンピュータ導入を具体的に詰めることとした。

八、97WC組織体系について
　97WC招致委員会を発展的に解消し、組織委員会を設置する打ち合わせ会を開催することが報告された。
以上

CONTENTS

表紙：アジア大会で豪快にシュートを決める中山剛選手

アジア第二次予選は12月30日にフランスで

来年5月8日からアイスランドで開かれる第14回男子世界選手権大会のアジア地区の予選は、今年すでに東アジア地区では5月、広島にて開催され、韓国が、また西アジアでは9月にクウェートがそれぞれ出場権を得ていたが、残りの一枠をかけて、西アジアのサウジアラビアと東アジアの日本との間で争われることが決定した。期日は12月30日、フランスの予定。

日本とサウジアラビアは先のアジア大会にて対戦し、日本が25－17で勝っている。しかしサウジアラビアは日本を破ったクウェートに25－22で勝っている強豪である。

この決定まで、当初予定していたアジア大会までの日程で調整していたものの、西アジア地区の予選が9月にズレ込んだり、AHFとの調整にふりまわされ、10月のアジア大会時、やっとIHFからの調停、調整により、今年度中に決定する様指示があった。

日本としては、アジア大会前、熊本での開催の打診とアジア大会終了後10月中の開催希望をしていたが、ことごとく断られ、AHFも調整が出来なくなり、とうとうIHFから通告され決定したものである。

今年、アジア大会また世界大会予選をみて、10月迄国内スケジュールを全日本優先ですすめてきたがAHFの調整不足で国内のスケジュールに混乱を起こした。特に日本リーグの後期の日程も決定されていただけに、開催県、並びに全日本選手加盟チームに多大なご迷惑をかけてしまった。

関係者の皆様の格別なる御支援、御協力により、後期リーグの日程を変更することになった。

全日本としては、アイスランドの次の日本開催の世界選手権を控え、何としてでも出場権を得て、はずみと一層の強化を図りたいところである。

12月行事予定

●大会

日本リーグ

日付	部	県	会場	対戦
12/3	1部男子	埼玉	朝霞市総合体育館	湧永製薬×大崎電気
	1部女子	〃	〃	北国銀行×シャトレーゼ
12/4	1部男子	埼玉	朝霞市総合体育館	大崎電気×本田技研熊本
	1部女子	〃	〃	オムロン×大崎電気
	2部女子	〃	〃	プラザー工業×イズミ
	1部女子	兵庫	高砂市総合体育館	ジャスコ×JUKI
	〃	〃	〃	日立栃木×大和銀行
	2部男子	〃	〃	大阪ガス×豊田自動織機
	1部男子	鹿児島	国分市総合体育館	日新製鋼×本田技研
	2部男子	〃	〃	豊田車体×トクヤマ
	2部女子	〃	〃	ソニー国分×ムネカタ

■後期日程

11月号（No.347）でご案内致しました日本リーグ後期日程について、1995年男子世界選手権アジア予選3位決定戦（日本対サウジアラビア）が本年12月30日にフランスで開催されることになりました。その結果、後期第1戦12月14日より12月25日の日本リーグ日程が変更（調整中）になりました。

日付	内容	会場
12/8～11	第46回全日本総合選手権大会	駒沢体育館／東京体育館
12/20～29	第13回世界学生男子選手権	トルコ
12/30	男子世界選手権アジア第3代表決定戦	フランス

●合宿

12/14～19　ナショナル男子合宿（大崎電気体育館）

●会議

12/10　常務理事会

ドレイパーは
D&Mのスポーツテープです。
draper®

サポーターとテーピングは、人類の知恵です。

サポーターもテーピングもアイシングサポーターもすべて私たち人類が生み出した偉大な知恵です。
人間の肉体がスポーツという
苛酷な試練にも耐えていけるように。
怪我をしたり、故障をしたときでもすみやかに回復し、さらに身体を守りながらスポーツが続けられるように。
D&Mは、サポーターやテーピングを通して人類のスポーツボディを進化させ続けます。

アイシングサポーター
#DI-10 肩用 蓄冷剤付
#DI-19 肩用 蓄冷剤無

ドレイパーDCテープ
(コットンテープ―総粘着包帯)

株式会社 D&M商会
SUPPORTER & TAPING TAPE

〒103 東京都中央区日本橋馬喰町2-2-4 電話/都内業務03(3666)0461㈹ 地方業務03(3666)0465㈹ FAX.03(3666)0990

エネルゲンの栄養成分(100mlあたり)

エネルギー	21kcal	アルギニン	0.2g
果糖	5g	ビタミンC	100mg
クエン酸	0.3g	β-カロチン	0.6mg

新製品のご紹介

パワーアシスト
エネルゲン

エネルゲンは、持久運動時のエネルギー補給を目的とし、スパート時に必要なエネルギー源の温存に着目して開発された本格的なスポーツドリンクです。

- エネルゲンには、アルギニン (Arginine) 果糖 (Fructose) クエン酸 (Citric acid) が絶妙なバランスで調製されています。
- スポーツマンの身体をいたわるベータカロチン、ビタミンCを含んでいます。
- さっぱりとした味で水分摂取ができます。運動中の水分補給は、体温調節と体液の確保という2つの理由から、今日では欠かせないものとされています。

大塚製薬は――
日本体育協会のスポーツ医・科学の振興を応援しています。

大塚製薬株式会社
東京都千代田区神田司町2-9

国際ハンドボール連盟

ランツ会長夫妻及びハーン専務理事をお迎えして

熊本県ハンドボール協会理事長　森　豊夫

熊本を訪れたランツ会長

平成6年9月9日は熊本県ハンドボール協会47年の歴史の中で、最も記念すべき日となりました。

もう既に皆様ご存じのように、1997年に開催される第15回男子ハンドボール世界選手権大会の日本招致熊本開催が決定した日です。

当日は、国際ハンドボール連盟総会が行われているオランダ・ノードベイクの田尻靖幹市長から、決定と同時に熊本の福島譲二県知事に電話が入ることになっていました。当初は夜中の決定になるかと覚悟していましたが、議事の進行が早まり、午後7時20分、県知事、市助役をはじめ県、市関係職員の皆さん、ハンドボール協会関係者約70人が待ちわびる中、電話の音が鳴り響きました。

その時の緊張感と、田尻市長からの決定の報告を受けた瞬間の会場の喜びと興奮は、言葉ではなかなか言い表せません。

この日を迎えることができましたのも、日本協会役員及び関係者の皆様方のご努力とこれまでのご苦労の賜物であると深く感謝致しております。

少々前置きが長くなりましたが、世界選手権大会決定の興奮も覚めやらぬ去る10月5日から7日の間、広島のアジア大会のために来日中のIHFランツ会長夫妻とハーン専務理事を熊本にお迎えすることができました。

熊本県協会といたしましても、IHFのこのようなVIPをお迎えすることは、初めてのことで、特にランツ会長はオーストリアで国務、外務をはじめ多くの大臣を歴任された方だということで失礼がないようにと大変緊張しました。

3人の皆さんは広島から熊本出身である竹野常務理事とご一緒に午後4時過ぎ熊本入りされ、3人とも竹野常務理事と非常に和気あいあいの雰囲気で熊本に到着される様子を拝見し、私達はとてもリラックスした気持ちになりました。

到着後初日は、ライトアップされた熊本城を正面にしながらの会食ということで、熊本の歴史の深さに触れていただきながら楽しく懇談することができました。

2日目は、午前中に競技施設の視察と午後から関係者との懇談を行いました。

これには、ご多忙な中、東京から朝一番の飛行機で渡邊日本協会副会長にも熊本においでいただき、3人の皆さんと一緒に行動いただき、熊本としても非常に心強く感じた次第です。

本来なら、メイン会場として計画している屋内運動広場(ドーム)を見ていただければ良かったのですが、まだ建設前ということで、大会の予選会場として予定している熊本県立総合体育館等をご視察いただきました。

また、今回の招致に大変ご尽力いただきました知事、市長、県、市の両議会議長とも懇談いただき、世界選手権大会に対する熊本の熱い思いを改めて感じていただけたものと思います。

夜は、熊本県体育協会の会長で本大会の熊本招致委員会会長でもあります八木会長から「ハンドボール関係者だけではなく、熊本県体育界全体を挙げて歓迎してはどうか」という嬉しいお声掛けをいただき、熊本県体育協会の役員をはじめ加盟の各競技団体からも会長はじめ役員の皆さんにもご出席いただき盛大な歓迎レセプションを催すことができました。

このレセプションで、ランツ会長から「97年世界大会を一緒に成功させましょう」という励ましの言葉をいただき、国際ハンドボール界にとって最大のイベントを本当に熊本で開催するのだ、ということを実感するとともに、責任の重大さを改めて感じました。

最終日には、熊本が世界に誇る観光地、阿蘇の雄大さと市内でのショッピングを楽しまれ、熊本の魅力を胸に熊本を後にされました。

最後に、1997年5月、24カ国から約1000人の選手、役員を迎え、世界の熱い視線が熊本に集まる中で、たくさんの日本のハンドボーラーの皆さんの力を熊本に結集いただき、感動を分かち合うことができることを今から楽しみにしております。

広島アジア大会を終えて

アジア競技大会競技施設専門委員（広島県ハンドボール協会会長）　山下　泉

聖火集火式。イズミの林五郎選手（右）が点火した

第12回アジア競技大会広島1994は10月16日、15日間の日程を無事終了し、閉幕した。大会は史上最多の42の国及び地域から約6800人を迎え、34の競技が行われた。初めて首都以外の地方都市で開かれた大会であったが、小さな混乱や不手際もあったとはいえ概ね成功といえるであろう。

メダル争いでは金メダル総数340の内、40パーセントの137個を獲得した中国が断然トップで、2位が韓国の63個、3位が日本の59個、以下カザフスタン、ウズベキスタン…と続く。日本も地元の利をいわれながら韓国に僅かながら及ばなかった。特にチームスポーツにおいて、野球と男子バレーボールの2つしか金メダルが取れなかったのは残念であると同時に、優勝したチームと比較してみて、体格、体力の違いが痛感させられた。また選手層の薄さという点でも各競技共通した悩みのようである。今回初参加の中央アジア5ケ国についてであるが、独立して以来経済的に恵まれず練習環境は大変厳しいそうである。今回までは旧ソ連の「遺産」で戦っていたとは言え、従来のアジア諸国とは違ったヨーロッパスタイルのプレーは国際色あふれる大会のためには一役買ったと言えよう。国に経済力がつき、スポーツ環境が整った時は、脅威となることは間違いない。

大会運営については必ずしもうまくいったとは言えないようである。組織委員会に同情できるが、入国する連絡のない国や、IDカードを持たない選手が突然空港に到着したりといった「アジアのおおらかさ」が招く混乱が多々あったと聞く。

また大会直前の中国と台湾の政治的確執による混乱、大会中のイラク軍によるクウェート国境近くへの集結等による緊迫、中国の核実験等、平和の祭典とは言うもののスポーツと政治は切り離せないものだということを改めて痛感した。

こうした外的要因だけでなく運営面でのもたつきは、組織委員会の要員数の不足と行政機構をそのまま組織委に持ち込んだため、いわゆる縦系列の組織となり、全くといってよい程、横の連絡、連携が取れなくなっていたことが原因である。また競技団体がプレ大会等の経験から運営に支障のない範囲で臨機応変な対応をしようとするのだが組織委がマニュアル通りに規制しようとしたことも運営をまずくさせた原因であろう。

次に地方都市広島で開いた大会の目的は、大会のスローガンにもあったようにASIAN HARMONY「アジアとの調和」であった。組織委員会をカバーしたのは県民、市民のもてなしの心であった。特に公民館活動として行った「一館一国運動」は各国役員・選手を感動させた。63館の大半がそれぞれ応援する国、地域の役員・選手を公民館に招き、地域住民と共に歌や踊りで交流を深めた。今後の交流事業へと発展したところもあると聞く。

熱戦に湧いたハンドボール競技

選手村も今までのアジア大会と違って銃剣に守られての選手村ではなかった。

選手村では一般市民との交流の場を大会期間中8日間ではあったが設けた。延べ23万人の市民が集まり、各国役員・選手たちと片言の英語・中国語で触れあっていた。大会前にボイコット騒ぎまでおこした中国、台湾の役員たちが握手したのも、市民参加の交流の場のアットホーム的雰囲気がそうさせたのであろう。このまたとない国際交流の場に勝利至上主義（？）の日本選手が殆ど参加していなかったのは残念であった。勝ちに徹するのも良いが、ホスト国としての役割を選手たちも考えるべきではなかったろうか。

公民館や選手村での交流風景は、まことに心なごませるものがあったが、選手たちの姿を広島市の中心地では殆ど見かけることはなかった。確かに市内の中心地・紙屋町と選手村とは距離にして約18キロメートルと離れており、この大会のために造ったアストラムラインに乗っても時間にして約36分、さらに往復運賃が840円と国によってはこの往復運賃が1ケ月分の給料に相当する国もあったりして、仲々市内の中心地へは行かれなかった様である。大会途中から組織委もこれではいけないということで、アストラムラインの回数券を役員・選手に配布したが、中心地に出れば出たで物価の高いのは既に承知しているので、広島の商店街はアテがはずれたようである。百円ショップが一番盛況であった。

さて、ハンドボール競技については当初予定していた数よりも少なく、男子5、女子4の参加であった。しかしながら、これもアジアのハンドボールの実情を見ると仕方がないとも言える。今回参加したチームと不参加のチームとの実力があり

すぎるため、メダルの可能性のないチームは参加を見合わせたためであろう。

大会に参加した役員は国際ハンドボール連盟よりアーウィン・ランツ会長（夫妻）、レイモンド・ハーン事務総長以下別掲の通りである。大会運営に当たったのは、ハンドボール関係者が中心の競技運営役員に中澤重夫本部長以下276名、東区役所を中心とする行政及びボランティアの約300名の合計約580名である。連日、全員が出勤した訳ではないが、延べ人数にすると大変な数であった。

ご存知のようにアジアオリンピック委員会（OCA）会長はアジアハンドボール連盟の会長も兼ねておられるクウェートの皇子シェイク・アーマド・アルファハド・アル・サバ氏である。今回はクウェートの対戦カードは全て観戦される程熱心であった。クウェートは初戦の日本戦に20－17で勝ち、次の韓国戦も引き分け、優勝のチャンスでもあっただけに熱が入っていたようである。そのクウェートがサウジアラビアに負けた時はサウジの選手を抱擁し祝福していたが、最終戦の中国戦に負けると、韓国レフェリーの笛に対しクレームをつけ、提訴試合としたことについては、後味の悪い結果となった。幸い提訴も却下となり、再試合などという最悪の結果だけはまぬがれ、関係者一同ホッとしたのも今となって思えば良い思い出か。

男子の試合スケジュールの変更やルールにない帯同レフェリー、懲戒委員会（TDC）メンバーへの日当の支払い、また日本人審判に対する不当な扱いなど、AHFとも激論したが、結論としては東と西とでは同じアジアでも相当考え方に違いがあるようである。

また今回、ドーピング検査も実施されたが、結果が出るまでに時間がかかるし、大変な事であると思った。

10月8日の土曜日あたりから観客が増え、当日券を求めて多い時は約300人の方が並ばれた。せっかくのチャンスだからと行政職の会場運営本部と折衝し、報道用席を一般席に開放してもらったり、本来は出来ないという立ち見としての入場を許可してもらったり、いろいろ世話になった。翌日の新聞にハンドボール会場の英断と出たのは「ヤッター！」という感じであった。いろいろな競技会場を見てこられた報道関係者の人に、「運営がうまくいっていたのはハンドボールとバスケット会場だけだった」と聞いて、今までの労苦も吹っ飛んだ気がした。

リハーサル大会をやっていたお陰で、あらゆる問題にも対処できたと思うが、事前のチェックを充分に行い、難しくないマニュアルを作成して作業を行うことが肝要と考える。

このようにアジア大会を無事終えることが出来たのも、多くの方々のご支援のお陰と改めて感謝いたします。次はいよいよ日本が世界に飛躍するビッグチャンス、1997年、熊本の世界選手権があります。一県一市だけで出来ることではありません。日本中の目を熊本に向けさせる様頑張りましょう。

最後にハンドボールを最も愛し、日本のハンドボールを世界レベルへ近づけるため努力をされ、広島アジア大会での日本チームの活躍ぶりを心待ちにしておられた湧永儀助氏が、大会を待たず6月に急逝されたことは大変残念でならない。心よりご冥福を祈ります。

オフィシャル＆審判

■国際ハンドボール連盟
会　　長　ランツ・アーウィン（オストリア）
事務総長　ハーン・レイモンド（フランス）

■アジア・ハンドボール連盟
会　　長　アーマド・アル・ファハド（クウェート）
事務総長　アブル・ハッサン・シェイド（パキスタン）

■㈶日本ハンドボール協会
会　　長　斎藤英四郎（日本）
専務理事　中澤　重夫（日本）

■技術代表
キム・チョン・ハ（大韓民国）
ファルダン・アーマド・ナサー（アラブ首長国連邦）

■上訴委員会
ダヒャブ・バダー（クウェート）
ハッサン・アーメド・アリ（クウェート）
渡邊　佳英（日本）

■ＡＨＦ懲戒委員会
エリック・エリアス（スウェーデン）
パク・チョン・ジョ（大韓民国）
シー・チャン・スー（中華人民共和国）
西山　逸成（日本）
山下　　泉（日本）

■主任審判
岡本　研二

■審判員
サイナ・マレク／ロブレウスキー・ヤセック（ポーランド）
リー・チャンハイ／リー・ジーウォン（中華人民共和国）
後藤　登／清水宣雄（日本）
コー・カンスク／ハン・チブン（韓国）
アルワニーン・エブラヒム／アルハイド・ハムド・サリュー（サウジ）
アルホン・ア・モハマッド／アルネジ・クファラフ（クウェート）

第12回アジア競技大会に参加して

日本選手団競技担当役員　市原　則之

42の国と地域が参加し、34競技337種目に約7300人の選手・役員が2週間にわたり熱戦を繰り広げた史上最大規模の広島アジア競技大会は、中国のダントツの強さの中、選手・役員それぞれが沢山のドラマと感動を胸にして10月16日、無事終了した。

今回は、旧ソビエトから独立した中央アジア5ケ国の初参加により、大会規模が一層ワイドでワールドな大会となった。

また、大会前のアーマドOCA会長（AHF会長）の一通の招待状から政治トラブルや開会式直後のネパール団長の逝去という不幸な出来事や、一部の国の選手が日本へ安住の地を求めて選手村から逃亡するという事件や、生活に困窮している国の選手がせっかく得た栄光のメダルを換金したり等々、沢山の話題に満ちた大会でもあった。

日本選手団は地元開催ということでかつてない、或は将来に於てもおそらく実現不可能と思われる選手・役員総数1017名という大デレゲーションを編成して広島に乗り込んだ。

サヨナラパーティーにて（中央・筆者）

私は光栄にもこの大デレゲーションの本部役員の大役をJOCより仰せつかり、松平康隆団長（JOC選手強化本部長）、小掛副団長（JOC選手強化副本部長）の元で、林務（JOC総務委員会常任委員）、三宅義信（JOC選手強化本部常任委員）、佐藤宣践（同）の6名の競技担当役員が、34競技を分担し、ソウル大会以降水を開けられていた韓国に追いつき、そして強豪中国に限りなく近づこうということを目標にして、事前合宿の激励から大会期間中の応援などに奔走した。

お陰様にて、各競技団体共大いに奮闘して、金メダル59、銀メダル68、銅メダル80の合計207個（北京大会174個）を獲得して、初期の目的を達することが出来た（韓国＝金63、銀53、銅63、計179）。

この成果は各競技団体共、来年待ち構えているアトランタ・オリンピックのアジア予選に向けて力強い手応えを感じ、更なる強化へと結びつくものと確信する。

ちなみに私の担当は、球技の団体競技で、ハンドボール（男女）、サッカー（男女）、バスケットボール（男女）、フィールドホッケー（男女）、野球（男）、ソフトボール（女）、セパタクロー（男）の7競技11種目で、金1（野球）、銀6（男女ハンドボール、女子サッカー、女子バスケットボール、女子フィールドホッケー、女子ソフトボール）、銅1（男子バスケットボール）合計8個のメダルを獲得し、中でも野球の金メダルと、金メダルに近い銀の女子バスケットボールの活躍は特筆すべきものであった。

また、これにバレーボールを含めた球技の団体競技に於てはここ数年、日中韓で熾烈な戦いを続けてきたが、今大会では日本女子が台頭し、やっと中国・韓国に王手がかかるまでレベルアップしてきたと感じる。

我がハンドボールに於ても、男女共ここ数年来より韓国の牙城を揺るがすことが出来なかったが、今大会では男女そろって躍進し、再びアジアの王者に返り咲く手がかりがつかめた様に感じた。

しかし、これには従来の固定観念から脱却して、根本的な強化施策を早急に立案し、実行に移して行かなければならないことは言うまでもない。

何れにしろアジアは日本・中国・韓国を中心とした東アジアだけではなく、近年徐々に西アジア勢が力をつけ、またこれにも増して侮れないのが中央アジアの5ケ国である。私が3月にJOCよりカザフスタン、ウズベキスタン等に強化状況の視察で訪問した折、カザフのアクパエア・アマンチャNOC会長は広島アジア大会では30の金メダルを含め、70のメダルを獲得すると公言したが、実際に金25、銀26、銅26の合計77のメダルを獲得し、公約を果たした。またカザフ同様未知数の地下資源を有するウズベキスタンも今後強化財源が充実すれば、かつてのソビエトや東独の様なスポーツ大国へ成長するであろうと予想される。

従って日本が今後、世界に羽ばたこうとすれば、今まで以上に高いアジアの関門が待ち受けるという新たな認識は決してハンドボールだけでなく、全競技共通した大きな課題となった大会でもあった。

世界よりアジア、先ずアジアの足下をしっかりと克服しなければ世界はなく、ましてや次回のアジア大会は大会のレベルアップのために25競技に絞ろうと提案があり、これは常識論として決定されるであろう。

我がハンドボール競技は、次回開催国のタイ（バンコク）はAHFに加盟していないと聞く。開催国にない競技が取り入れられることは不可能であることは誰でも承知のことである。熊本の世界選手権も大切であるが、同時にアジアの足固めのため、早急にAHFやタイに働きかけ、実施競技となる様に努力することが肝要と考える。

何れにしろ今回のアジア大会への参加は、私にとって大変意義深いものであった。従来までのハンドボール競技内の範囲内だけの活動でなく、日本選手団全体の活動に参加出来たことは大変参考になった。

こうした機会を与えて頂いたJOC並びにJOCに送り出して頂いている我が愛するハンドボール協会に対し、心から感謝すると同時に、今回得た様々の知識をハンドボール界活性のために寄与出来るよう頑張っていく所存であります。どうもありがとうございました。

男女共に銀メダルの陰に…

強化委員長　井　薫

全国のハンドボール関係者の皆様、全日本男女チームのアジア大会出場に対しましては、物心両面のご支援をいただきありがとうございました。お陰様で男女共に銀メダルを獲得しました。

アジア大会に向け、この数年強化を進めてまいりました中で、男子金メダル、女子銀メダルを目標として、結果において僅かに及びませんでしたが、バレーボール、サッカー、バスケットボールの球技の中で男女が決勝に残りましたのはハンドボールだけで、その面では開催地広島の皆様をはじめ、ご声援をいただきました多くの皆様に、幾分なりともお返しが出来たのではないかと思います。

男女スタッフも使命感に燃え、精一杯頑張ってくれました。また、ドクター、トレーナーの諸氏にはプレイヤーのコンディション維持に、親身のお世話をいただきました事をご報告させていただき、お礼に代えたいと思います。

さて、大会を振り返ってみたいと思います。男子の緒戦は、昨年のアジア選手権大会で2敗を喫した苦手クウェート。前半、GK橋本の好守とサイドプレイヤーの活躍でリードを奪い、後半も先に点を取り5点差。勝利パターンに入ったと誰もが思ったあたりからシュートが決まらなくなり、期待の山中、岩本が不発。勢いづくクウェートの猛攻に、頼みのディフェンスまでが崩れての逆転負け。後半に決まって現れる不調の波の克服と、アタッカーの不安定度、さらに緊迫場面での基本的ミスの排除の未解消を露呈したゲームだった。

中国・サウジアラビア戦は、中山、岩本、首藤が意欲的にシュートを決め、ロングが先行するとゲーム展開のストーリーが描きやすく、中国には後半追い上げられたものの、サウジ戦は素早いつぶしのディフェンスでゲームの主導権を握り8点差の勝利。このサウジは第14回世界選手権大会（95年5月・アイスランド）のアジアの最終予選の相手国であり、その意味からも圧勝しておきたい訳で、先ずは会心のゲームと評価したい。

韓国もクウェート戦を引き分け万全の仕上がりとは思えなかったが、サウジに14点、中国に15点差で勝ち上り、10月14日、日本対韓国の金メダルをかけた決勝が決まった。

日本が岩本、魚住のロングアタックで2点連取、韓国もすぐに追い込んでシーソーゲームを展開。GKのファインプレーが双方にあり互角。後半、立ち上がりに韓国にカットインと巧みなステップを決められ4点差。さらに終盤近くに再び4点差があり、これまでだとここで大差になりがちであったが、首藤、中山のロング、末岡、堀田、田中も飛び込んで再度1点差に追い上げ、満員の会場の応援も最高潮に達した。最後にサイド、中央から決められ25－21で終了。5月の対戦時の得点差を半分にはしたものの、今大会の韓国はベストでなかっただけに、金メダルも夢ではないゲームだった。

女子はカザフスタンのヨーロッパスタイル、特に長身者のポストプレイを最重視。結果は26－24の僅差ではあったが、前半の大量リードが効果的だったし、山川、田中の若手が活躍。

中国戦は前半で14－11のリードを許し大苦戦。17番の石偉にトータル11失点、後半も同じ得点差で推移したが、10分過ぎあたりからベテランの市来、谷本が速攻、カットインを連発。終盤には中国ディフェンスの裏を、サイドからポストに通してのシュートが3本決まって逆転勝利。勝負所でのベンチワークが冴えたゲームだった。

決勝の韓国戦は日本より韓国に固さが見られ、伸び伸びとプレイする日本と好対照。前半はほぼ互角。しかし後半になると懸念されたミスと、得点が止まる現象が出始め、あっと言う間に勝負の流れが傾いて34－20の大差がついた。

この傾向は男子と共通のもので、体力の低下が招く集中力の欠如であると思われるが、その場面をどう耐えて反撃につなぐのか、戦術でしのぐのか、効果的メンバーチェンジはないのか、スタッフに課される勝利への手法は、まさにこの部分であり、与えられた時間、与えられた人材でどう闘い、答えを出すのか、スタッフの評価が結果で問われる所以である。

ＨＡＧＣ、広島県協会、そして日本協会にお世話になりましたが、特に広島県協会の皆様の豊かな体験に基づく大会運営は立派でした。

ただ男女が金メダルをかけた決勝戦が、ＴＶで全国に放映されなかったのは残念で、今後どうすれば可能なのか、関係の方に示唆をいただければ、長期間練習を重ね、頑張った現場とプレイヤーたちに、これに優るねぎらいはない事を申し上げ、アジア大会の報告としたい。

更に大きな目標に向かって

全日本男子チーム監督　蒲生　晴明

1. はじめに

1994広島アジア大会の開催にあたり、数多くのご支援、ご厚情をいただいた多くのハンドボールファン、関係者の方々、また各地に於て合宿で大変お世話になった皆様、選手所属チームの皆様に、厚く御礼申し上げます。

2. アジア大会までの強化と総評

ハンドボールは1982年ニューデリー（インド）で初めて採用され、男子は銀メダルだった。1986年ソウル大会は、辛勝して銅メダル。1990年北京大会は、韓国に1点差で敗れ、銀メダル。今回は4度目の挑戦、初優勝を地元日本でという気持ちで、強化を実施してきた。今年1月～10月までの国内スケジュールを我々全日本のために11月以降にズラしていただいたこともあって、「あたかも、単独チームのように！」というスローガンのもと、選手たちと全力を尽くしトレーニングができ、その結果、チームとして大変良い状態で仕上がって大会に入れた。しかし、大会に入る前は相当のプレッシャーがかかるのではないかと思いきや、選手たちは普段と変わることなく日程を消化していた。我々スタッフが心配していることがウソの様であった。

いよいよ10月2日に開会式が行なわれ、いやおうでも重圧がかかってくるわけだが、良いムードであった。10月6日、クウェート戦であったが、スタートから緊張が漂った。しかし前半はミスはあったものの8－4と4点リードで先行した。後半に入り、攻撃のミスから失点を連続して、逆に5点リードされた。このことは、国際経験の不足や精神的なタフネス不足、あるいは基本技術の未熟さであると思う。その結果、クウェートに惜敗。けれども第2戦、中国に絶対に負けられない状況から逆転勝ち。第3戦、サウジアラビア戦では、このゲームに敗れるとメダル獲得も危ない状況からの快勝。さらに金メダルを賭けた韓国戦も先行はされるものの、何度も1点差まで追いつき、チームとして粘れた。選手たちは、一戦一戦、精神的に逞しく成長していくのが手に取るように感じられた。

しかし、選手は負けた悔しさを深く持っており、今後のトレーニングや各所属チームでの取り組み方が変化していくものと期待している。

1997年の世界選手権熊本開催が決定したことにより、世界の中、日本の中でのハンドボールは注目されることと思う。このような状況の中で、我々全日本は、1995年のアイスランド世界選手権出場、さらにアトランタ・オリンピック出場といった大きな目標があり、それぞれの目標に向かって最大限の努力を実行し、この目標をこの手で勝ち取っていきたいと考えている。

3. アジア大会の反省と今後の強化

今回のアジア大会では、韓国に次ぐ銀メダルという成績であった。開幕第一戦クウェートに敗れ、金メダルどころか、メダル獲得も不可能になることも考えられた中、選手たちは絶対に負けられない相手に勝ち抜き、精神的な面で成長したことを感じている。しかしながら、アジア各国のハンドボール技術は、ここに来て急成長していることも事実であり、今後、日本は韓国、中国のみならず、西アジアの各国も同レベルで注意しなければならない。

また、我々日本が、このアジア各国に勝ち抜いていくために、第一に国際試合の経験（特に日本での国際試合の経験）、第二に個人技術の成熟であると考える。細部にわたり分析し具体的対策は立案していくが、シニアだけにとどまらず、アジア各国とのジュニア層の国際経験を日本協会として実行に移していくことが、本当の意味でのアジアチャンピオンになる施策と考えている。

いずれにしても大切なゲームの大切な場面でトレーニングしたことが、大胆に確実にプレーできる選手を育成するために、国際試合を数多く実施し、試合現場で鍛え上げていくことが、今後の最も大切な強化施策と考える。

4. おわりに

広島アジア大会に地元日本代表選手団として参加でき、大変光栄に思っております。結果は銀メダルでしたが、大会運営の皆様や全国のファン、合宿等でご支援、ご厚情をいただいた関係者の皆様に、重ねて御礼と感謝を申し上げたいと思います。今後も全日本チームの活動をご理解の上、ご支援、ご協力の程、よろしくお願い致します。

一七五日間の合宿の成果あり

全日本女子チーム監督　緒方　嗣雄

4月からスタートした長期合宿で、ありとあらゆるトレーニングをやり尽くし、本大会に臨む事となった。試合の順番も我々が期待した通り第一戦はカザフスタン、第二戦は中国、第三戦は韓国である。トーナメント戦のつもりで一戦一戦1点差で勝ち上り、最終の韓国戦で全勝同士でぶつかり、金メダル争いが理想通り展開できる。我々にとって願ってもない大会となる。

■第一戦　カザフスタン

昨年の9月、中国・上海でのアジア選手権で初対戦して以来2回目の試合である。188cm、187cmと大型のポストマン2人を中心としたプレーは、確実に得点が取れる手堅いチームである。日本チームの作戦はポスト一本に絞り、防御システムも0—6とライン際を守る防御で対処する。8月の欧州遠征では、このカザフスタンのポストマンを予測して、大型ポストマンと対戦し、いろいろな防御を実験し、一応守ることには自信を持って試合に臨んだ。

立ち上がり、やや堅さを感じたが、緒戦に臨む意気込みが強い。比嘉選手のサイドシュートを皮切りに貴田選手のロングシュート、田中選手の速攻と着々と得点を重ね、前半は17—10。一方的な試合となった。ハーフタイムの間、前半の貯金は考えず、お互いに0点からのスタートをする事、防御でのリズムを取り、速攻に繋ぐ事、相手ポストマンを完全にマークする事を約束して後半のスタートである。いきなりポストマンに得点を許してしまった。貴田選手のロング、上出選手のステップシュートで前半を凌ぐ勢いを感じた。カザフスタンもポストマンを使う戦法に変えてきた。

前半の体力のある間は良く守っていたが、後半に入り体力が無くなってきて守りが甘くなってきたところを攻撃された。ポストからの得点、7mスローにより3失点。後半はこのパターンで1点差まで追い付かれたが、最後は山川選手のロングシュート3連取で引き離し、逃げきって3位以上を決める大きな1勝であった。

■第二戦　中国

試合開始後、中国のエース石偉選手のカットインで先制されたが、日本も田中選手のサイドで得点。続く市来選手のポストシュートと一進一退の攻防が繰り広げられた。貴田選手、山川選手とロング陣が好調。24分過ぎまで1点リードであったが、その後パスミス、キャッチミス、チャージングのミスが続き、前半11—14の3点リードを奪われ前半を終了。

後半に入り、連続2失点して5点差とされるが、日本も谷本選手のサイドシュートで4点となるがよく粘り18分過ぎには同点となる。その後は一進一退で27分、中国・石選手にカットインシュートで1点リードを許すが、その直後、右サイド比嘉選手から中央ポスト市来選手へパス。それを決めて同点。その後すぐ後、貴田選手がパスをインターセプト。独走態勢に入ったところを後ろからファールを受け、相手の2分間退場となり日本に絶好のチャンス。残り30秒、センター上出選手からポストの市来選手に絶妙のパスが通り、またしてもポストシュートで1点リードで残り4秒、中国のロングシュートを村山選手が死守して中国より3年目の劇的な勝利を挙げ、2位以上を決めた。

■第三戦　韓国

市来選手のポストシュートで先行。幸先のよいスタートである。田中選手のサイド、山川選手の速攻などで20分までは終始リードを保ったが、26分、山川選手の退場の間に3点連取され12—16で前半終了。後半も市来選手の速攻でスタートしたが、一度奪われたリズムは取り戻す事なく、あらゆるポジションから得点を挙げられ一気に9点差となる。一方的な展開となり、点差も開くばかりであったが、日本も最後に速攻を決めるが34—20の大差の完敗である。

韓国チームに好き放題の試合をされ、後味の悪い試合をした。とても残念である。

試合全体では韓国戦以外はある程度満足いくものであり、観客にも感動を与えたという事で175日間の合宿の成果も出せた事に感謝致します。

合宿から大会まで関係各位に大変お世話になり厚くお礼申し上げます。

第12回アジア大会広島成績表

10月7日（第1戦）

日　本26（17—10 / 9—14）24カザフスタン

10月11日（第2戦）

日　本27（11—14 / 16—12）26中　国

10月13日（第3戦）

日　本20（12—16 / 8—18）34韓　国

（順位）①韓国②日本③中国④カザフスタン

アジア大会個人得点表

	カザフ	中国	韓国	合計
川島	0	0	—	0
市来	0	5	4	9
松本	—	1	—	1
小松	—	0	0	0
比嘉	2	1	1	4
貴田	3	5	2	10
小俣	—	—	0	0
谷本	5	7	0	12
松下	—	—	0	0
西村	0	0	0	0
山川	7	3	3	13
村山	0	0	0	0
西口	0	—	—	0
土師	1	—	—	1
上出	3	2	2	7
田中	5(2)	3(1)	8(3)	16(6)
合計	26(2)	27(1)	20(3)	73(6)

立派な大会でひとつの残念な出来事

審判委員会副委員長　岡本　研二

■はじめに

　前回の北京大会にはレフェリーとして参加したが、今回は体調のすぐれない大塚審判委員長の代理として、大会主任審判員（日本流にいえば審判長）という大役を仰せつかった。１９９７熊本世界選手権が決定した直後であり、ホスト国としての審判運営体制の国際性が試される大会となったわけであり、特にＩＨＦからエリアス、ボルスタット両氏が派遣され指導にあたるという緊張感の中で大会が運営されるという日々であった。

　結論的にいえば、広島県組織委員会の奮闘により、大会は立派で見事に、そして円滑に運営されたと評価できるのではないだろうか。

　しかし、それがゆえに、ただひとつだけ、あえて残念な事実をも指摘しておきたい。今後の国際大会の開催、日本レフェリー界の世界への飛躍を考える時、重要な問題といえよう。

■参加したレフェリーは？

　近年、アジア地区の大会には、東アジアと西アジアの両地域が相互にレフェリーを派遣しあうシステムがとられているが、今回は参加国帯同制というＡＨＦの規定により、韓国、中国、日本とクウェート、サウジアラビアの５カ国の参加にとどまった。当初予定されたカザフスタンからは、不参加の結果となった。また、ＩＨＦ招待レフェリーもポーランドのシャイナ、プロベリスキーペアは来日したものの、ノルウェーペアは急病のためキャンセルとなった。

　従来、アジア地区大会では厳しい試合や混乱が予想される試合はＩＨＦ派遣のヨーロッパレフェリーが担当し、当事者が関与する割当ては皆無に等しい状況であったが、今回は「アジアのレフェリーがアジアの試合を裁く」という事態が生まれたのである。これは、日本レフェリーにとっては、力量を試される絶好のチャンスともなった。しかし、このことが、逆に大きな問題を生み出す事態を引き起こしたのである。

■異常な事態とは？

　レフェリーの試合割当てについて今回は非常に興味ある、というよりむしろ奇妙な事実がいくつかあり、それと関係し、試合後の提訴事件も生じた程であった。国際大会には時折あるといえば、それまでのことども言えるが、今回は今後のアジアハンドボールの行方にとって看過することのできない問題であったといえる。以下、列記してみたい。

　①オープニングゲームと男子ファイナルがＩＨＦゲストレフェリーではなくクウェートであったこと（エリアスはレフェリーミーティングで「女性の試合を担当したことのないものがどうしてできるのか、誰が決めたのかは知らないが」と言った）。

　②ＩＨＦレフェリーが４試合、中国、韓国、クウェートが３試合、サウジ２試合の担当に比して、日本だけが３日目の１試合の割当てに終ったこと（聞くところによると、アラブのある国がＩＨＦレフェリーの割当てを拒否。また、当然、最終日の担当は日本レフェリーと誰もが…ほとんどのレフェリーさえ…思っていたにも関わらず、中国とサウジの試合は日本の順位に影響するとの意見で変更されたとのこと。そうなら、今大会は全て、すでに国のからみがあったはず）。

聖火ランナーとして甲田町を走る玉村選手

　③中国―クウェート戦で中国が勝ったが、試合後、レフェリーの判定の食い違いを理由にクウェート側から提訴があり、上訴委員会で却下。ちなみにレフェリーは韓国。４日目の韓国―クウェート戦は引き分けという背景があった。

■誰が決定したのか！

　以上のような状況がなぜ生じたのか、疑問に思われると思う。大会審判長は誰なのか、その権限はどうなったのか。また、エリアスやボルスタットの日本レフェリーへの評価はその程度だったのかなどと。

　端的にいえば、ＡＨＦの審判や試合運営の決定は、数名の委員によって行なわれ、今回のようなレフェリーの割当ても、その「テクニカルコミティー」によって支配されていた、ということである。大会審判長の私？やＡＨＦの審判委員会委員長のパク氏（韓国）やＩＨＦのエリアス、ボルスタット氏は蚊帳の外におかれたのである。世界選手権レフェリー候補としてアジア連盟の推薦候補であり、「よくコントロールできた」（エリアス）日本のレフェリーはＡＨＦの政治劇の犠牲となったといえる。

　おそらく、今回の運営についてはレフェリーサイドからだけではなく、様々なところで、この「アラブ主導」の異常さを指摘する声が出ることと思う。今後の日本ハンドボール界の世界への台頭の道の中に、アジアハンドボールの『ルールの確立』が大きな課題となろう。ルール、それは神聖かつ正義でなければならない、とつくづく感じた大会であった。

アジア大会の話題

ハンドボールのプログラムが好評

全国各地からの報道各社から、また観客の方々からも他競技では見られないすばらしいプログラムと好評。中身は参加選手の名簿、身長、体重、年令は勿論のこと各国のチーム紹介、お国のこともくわしく記載。

またハンドボールの歴史、主なルール解説（絵入り）、レフェリーの動作図、過去のアジア大会の記録等が掲載されており、大変親切であり、プレイに興味が一層湧いたとの声。

スポーツ記者だけでなく、アジア大会の大きな大会には各社より社会部、経済部の記者も派遣されているだけに、ハンドボールの取材が初めての人もいて、大いに喜ばれた。

また全日本男女の詳しい記事、選手の特徴も配布しPR。特に出身県からの取材が多く、大いに資料が役立った。

試合記録の結果の早さにビックリ

毎試合ゲーム後10分から15分にランニングスコアはじめ、個人のシュート率、シュート内容、ミスの内容まで即記録が出てきて、報道に提供。

外国の方は勿論のこと、日本の報道陣までその早さと、記録の内容掲載の素晴らしさに感嘆！　ハンドボールを絶賛してくれた。

この記録を担当した村松、小山両氏らが中心となりすすめたもので、今年5月の時にも大いに活躍した。

さらにくわしい記録も可能とのことで益々研究に熱が入っていた。

ドーピング検査実施

ドーピング検査が行なわれたのは、大会が始まって4日目。毎試合実施されるのではと、選手もベンチも心配していたが今回は途中から実施。

検査する選手は、メディカルの担当者が各国チームの各々のベンチにゲームの途中、大きな番号札（ナンバー）と袋をもって、チーム役員（主にドクター）の立ち会いのもと番号札を役員が引いて、引き当てた番号の人が終了後、ドーピング検査をうけることになっていた。

アジア大会では大きなトラブル（他競技の選手が一人陰性と判定された）もなく、終了したが、薬物利用は結果的に本人の身体をこわすもとになるので、スポーツ界でも大きな課題としてオリンピック、世界選手権大会の各競技で頭を痛めている。

中国女子チームに16才のプレイヤー

今回アジア大会に派遣してきた中国女子チームはベテラン、若手のメンバーで構成されていて、最年長は24才で得点王にもなったシーウェイ（石偉）。しかし10代がなんと5人も入って、将来の展望に立ったメンバーとなっている。

中でも一番の若手は16才のホアン・シューピン（黄淑萍）で攻撃ではセンタープレイヤーとして、ボール回し、シュートと16才には思えない球さばきと身のこなしは将来、中国チームの間違いない中心選手となりそう。ボールセンス、身のこなしといい将来性豊か。日本にとって手ごわい一人になりそうである。

先輩たちにまじっても堂々とし、時には全体をリードする場合もあり、DFでもセンターを守っていた。

日本はほとんどが実業団選手で占められているが、JOCのオリンピック大会の中から早くこういう選手が出てきて欲しいものである。

ボランティアも活躍

今回のアジア大会の特長の一つは広島県民の心暖まる親切なもてなしと、数多くのボランティアの人で大会が成功したことである。

慣れない仕事のため若干のトラブルもあったが、ボランティアの人達の情熱と誠意で十分こたえて

いただいた。
ハンドボール会場でも多くの方々が連日、朝早くから夜遅くまでお手伝い。中にはご夫婦でハンドボールの大会を底辺から支えていただいたことに感謝しなければならない。
会社の休暇をとり、また企業から多くの人達が大会のため人為的派遣をしていただいた。
こうした人達のお蔭で日本チームが出場しない日でも多くの観衆で体育館が埋まり、熱戦が繰り広げられた。入場券の当日売りが少なく、切符を買うため300人の人が会場前に並ぶこともあり、新聞でも取り上げられる程の盛況であった。テレビ中継は残念ながら全国放送はなかったが、中国五県に男女の日本チームの活躍がNHKを通して生中継された。

ゲーム終了後記者会見

毎試合ゲーム終了後、報道関係者から、チームの監督が共同記者会見を行なった。
日本の男女監督は必ず出席したが、他の国の監督は苦戦したり、負けたりすると、今日は一切話したくないといって会見を拒否。報道係の藤本、早川両氏を悩ませていた。
会見室がなく、通路をしきっての記者会見のためボランティアの人が「お静かに」のプラカードでガードしながら行なった。
また外国の監督にボランティアの通訳が大活躍。時々、専門用語が飛び交う中、記者会見をとりしきった早川文司氏（企画・広報委員）のリードで何とか切り抜け、ホッと胸をなでおろしていた。
海外のジャーナリストも入り、中には3人の通訳を経てやっと伝わることもしばしばで、国際試合の会見の難しさをあらためて痛感した。

クウェートがAHFに提訴

クウェートは10月10日(月)の対サウジアラビア戦において、22－25で敗れたゲーム終了後、審判（韓国ペア）の判定に対して異義を申し立て、AHFに250ドルを積んで提訴をした。
クウェートは試合前半途中から審判の判定に対して不満と不服を示し、再々オフィシャル席に詰め寄り、猛烈な抗議を行ない、警告のイエローカードまで飛び出した。
クウェート側の抗議は次のような事らしい。コートレフェリーはフリースローで、ゴールレフェリーが7mスローのゼスチャーをしていたのにということで二人の判定が食い違ったためのものであった。
AHFのアーマド会長もハーフタイムにコートに出てきたりして、険悪なムードになった。しかし翌日、理事会が開かれたが、却下された。

熱い戦いをレンズで追う！

木内カメラマンはハンドボールファン

広島アジア大会でハンドボール競技の会場となった東区スポーツセンターで、2台のカメラを携えてコートサイドで伯仲する試合を熱心に撮っていたカメラマンがいた。木内兵太郎氏だ。
若いころから写真が大好きで、ある日、子供のハンドボールの試合を初めて撮った。その写真を見て、子供たちが喜んでくれた。それがきっかけとなって、それ以来、ハンドボール競技の写真を撮り続けている。
中学生、高校生の大会などを観客席からカメラを構え、動きの早い動作やボールさばきをこの位置から撮りながら、「いつかコートサイドやネット裏から撮りたい」と思っていたそうだ。
本業は株式会社木内本店のオーナー。経理事務所と乳酸製品の販売を業務とし、千葉県ハンドボール協会の監事を務めている。
今までにも県内で開催された日本リーグや国際大会等の写真を本誌に寄稿してきた。「今後も国体や全日本総合の写真を機関誌に紹介していきたい」と語る。
「写真を通してハンドボールの普及につながる写真を撮りたい。そして一枚の写真からハンドボール界が拡大することを願っています」と抱負を語っていた。

レフェリーの決め方？

ホスト国である日本から国際レフェリーで経験豊かな後藤・清水のペアが今大会に選ばれたが、残念ながら1ゲームのみしか吹かせてもらえず、多くの関係者からも何故の声が多くあがった。理由はどうも翌日のゲームの割り当てを決める審判委員会でノミネートされたものが、カウンセルメンバー（理事会）での承諾を得る段になってかえられてしまうことらしい。
これには韓国・朴（バク）氏、主任審判で派遣された岡本研二氏も頭を痛め、カリカリ。
IHFからのエリック・エリアス氏、ボルスタット氏はAHFの問題だからということだが、「日本の審判のレベルの高さは我々は十分理解している」といっても、実際1ゲームしか笛を吹かなかったのだから、なんとも残念だった。IHFでは審判委員会が決定したことはそのまま通る様になっているが、IHFのメンバーも怪訝そうであった。
サヨナラパーティーでの金副会長がアジアはもっと皆で力を合せて、レベルアップを図る必要があると挨拶をしてしめくくったが、広いアジア、大会運営はじめ、あらゆる面での見直しとルールづくりが必要である。

（日本協会常務理事　木野　実）

10月 4 日に行われた代表者会議

広島アジア大会
グラフ

銀メダルの全日本男子チーム

銀メダルの全日本女子チーム

谷本泉選手のシュート（対中国戦）

堀田選手のシュート

魚住選手

岩本選手のシュート決まる（対中国戦）

第13回男子世界学生選手権大会代表決まる

全日本学生選抜チーム16名の選手が別表の通り選ばれた。大会は94年12月27日から95年1月4日迄、トルコにて開催される。

12月28日～30日迄　予選リーグ
1月1日～2日　準決勝リーグ
1月3日　順位決定戦

11月現在、16チームの参加が予定されている。

選手団は12月18日に出発し、ドイツ・フランクフルトにて調整合宿後、26日にイスタンブール経由でイズミールに入る予定。帰国は1月5日。

世界の強豪相手にどこまで上位にくいこんでいけるか。またこの中からも1997年の世界選手権大会に出場する選手が多く出てくることの期待も大きい。

全日本学生男子選抜チーム選手団

役職	氏名	所属
監督	松井　幸嗣	全日本学生ハンドボール連盟理事・日本体育大学監督
コーチ	松　喜美夫	全日本学生ハンドボール連盟理事・函館大学監督
コーチ	奥田　新治	日本協会Bコーチ・湧永製薬
帯同レフェリー	小笠原久郎	国際A級審判員(日本ハンドボール協会審判部)
帯同レフェリー	浜田　浩和	国際A級審判員(日本ハンドボール協会審判部)

選手	氏名	所属大学名	学年	身長	体重	出身高校
GK	四方　篤	日本体育大学	4年	191cm	90kg	北陽高校
GK	坪根　敏宏	福岡大学	3年	188cm	80kg	久留米工大高
GK	日原　一幸	名城大学	3年	181cm	70kg	桜台高校
CP	小沢　勝利	日本体育大学	4年	178cm	75kg	横浜商工高校
CP	宍井　秀徳	国士館大学	4年	185cm	80kg	大分電波高校
CP	辰已　涼外	中部大学	4年	178cm	80kg	添上高校
CP	松本　和也	日本体育大学	4年	167cm	62kg	金沢市工高校
CP	茅場　清	日本体育大学	3年	185cm	78kg	笠間高校
CP	辻　昇一	日本体育大学	3年	183cm	68kg	学法石川高校
CP	広政　宣孝	筑波大学	3年	178cm	65kg	下松工業高校
CP	笹浪　重俊	日本体育大学	3年	178cm	70kg	金沢市工高校
CP	上野　修一	大阪体育大学	3年	176cm	63kg	兵庫育英高校
CP	池辺　健二	大阪体育大学	2年	192cm	85kg	久留米工大高
CP	佐々木教裕	日本体育大学	2年	191cm	81kg	拓殖大学一高
CP	田中　慎一	福岡大学	2年	180cm	70kg	久留米工大高
CP	森山　透	日本体育大学	2年	174cm	65kg	熊本市商高校

第2回東アジア競技大会 97年韓国(釜山)で開催決定

朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）が返上していた東アジア競技大会は、1997年4月中旬～5月にかけて釜山で開催される予定で、実施競技は今後検討される。ハンドボールも現在のところ未定である。これは東アジア競技大会連合（EAGA）が広島で理事会を開き決めたものである。

1997年5月には日本（熊本）で男子世界選手権大会が開催されることになっている。

第46回全日本総合選手権大会 男子決勝戦、NHKテレビにて放映

日時　12月11日(日)　午後3時30分～5時30分
解説　蒲生晴明氏(全日本男子監督)

審判委員会からのお願い ビデオテープを貸して下さい

各種大会も終わり、いろいろな感動、ドラマが生れたことと思います。審判委員会では審判員の研修のために、実際の試合で起こったあんなプレイ、こんなプレイをビデオテープで募集いたします。

あの判定はおかしいのではないか、このように判定するべきではないのか、あの処置はわからない、レフェリーの判定、行動だけではなく、プレイヤーももっとルールを知るべきである、等々。みなさんのチームで撮った貴重なビデオテープを貸して下さい。

テープ提供に対して薄謝をさしあげます。テープはお返しします。きれいな画質を確保するためにも、できる限りマスターテープでお願いします。

テープの種類はVHS、S－VHS、8㎜、Hi－8は問いません。簡単な状況説明をお書き下さい。

▼送付先
東京都渋谷区神南1－1－1
㈶日本ハンドボール協会
ビデオ係

第4回アジア男子ジュニア選手権大会に参加して

選手団団長　植村　繁

　アジア大会役員として広島滞在中にアジア男子ジュニア選手権大会に選手団長として同行するよう指示を受けたのは10月7日でした。

　広島から戻ったのは15日の夜。溜った仕事を片付け、同行する選手たちに会えたのは出発2日前の10月19日という慌ただしさで、ろくに準備もせず21日の出発日を迎えました。

　今大会の会場のシリア周辺の諸国は決して政情が安定しているとは言い難く、何時何が起きても不思議ではないと言う状況に加え、シリアそのものについても全く知識のないままの遠征となりました。

　しかし、日頃から日本協会の遠征の手配にご協力頂いているエモックエンタープライズの社長の、何事が発生しても対処出来るようにとのご配慮で、特別に添乗員を付けて頂いたのは大変心強く有り難い事でした。

　試合のこと、滞在中の苦労話は他の方々にお願いし、私は大会参加に当たって当然成すべき事、ジュニア育成について等、思い付くままに述べてみます。

1．帯同審判について

　北京で開催された前回の大会時も審判を帯同せず、種々問題があったと聞いていましたが、今回も大会参加国の義務である審判の帯同がありませんでした。しかも、韓国の審判も一人が出発直前の交通事故で不参加。結局、極東は中国1ペアのみの参加でした。

　この様な状況では西アジア審判の判定がアラブ優先になるのは目に見えていました。2点リードすれば必ず退場者が出るという環境のもとで、試合をせざるを得ない選手たちは気の毒でした。

　この様な事実を審判委員会はどの様に考えているのでしょうか。大会参加の義務すら果たせない審判の在り方に、大いに疑問を感じざるを得ません。

2．ジュニアチームの育成について

　今回、遠征したジュニアチームの強化合宿は、セレクションを除けば直前合宿としての2・5日間だけだったとのことです。いろいろの事情があってのことだとは思いますが、ジュニアとは言いながら世界選手権の予選に臨むにはあまりにお粗末ではないでしょうか。

　この様な体制で、20才以下の選手たちに目的意識を持てと言っても、果たして理解出来るでしょうか。ただナショナルジュニアとして海外遠征に参加したと言う実績しか残らないのではないでしょうか。

　一方、アラブ諸国の取り組み方には目を見張るものがあります。今大会の上位のすべてはアラブ諸国が占めました。この様な現状を見るにつけ、日本ナショナルの今後を憂うるのは私一人ではないと思います。早急な対策が望まれます。

3．国際情勢の認識と遠征準備について

　先に述べた様に、私自身が急な指名で状況を充分に把握する時間もないままの参加で、選手諸君には誠に申し訳なく思っていますが、それにしても、日程、開催地の状況、生活環境等についての情報が全く不足でした。

　試合前日の24時に現地着（航空便の都合で、途中一泊したとは言え24時間近い旅）と言う日程、東洋人には容易に馴染めないアラブ料理、原産地のミネラルウォーターと称する瓶詰の水を飲んでいても起こる下痢等々。また、開催地首脳、各国選手団長等への贈呈する記念品等についても全く準備なく、万一を考え個人で用意して行ったもので対応するありさまでした。

　相手は日程の急な変更、1時間や1時間半の遅れは何とも感じないアラブ人ですから、どんな事が起きても対応出来る準備が必要です。アラブ諸国への遠征は久しぶりであっても、毎年なんらかの海外遠征を経験しているのですから、もっと早めで、且つ周到な準備が出来るのではないでしょうか。

　あまりな現状に、執行部の一員として非難を被るのを覚悟で、思ったことを書かせて頂きました。

計画性ある強化が今こそ重要

ジュニアスタッフ　監督　高橋　精一／コーチ　奥田　新治

　今回のジュニアハンドボール世界選手権アジア予選は、二転、三転して中東のシリアで開催される事になった。中東の情勢の変化や大会前日のシリア入国等、不安を感じつつ10月21日、成田を出発する。

　今回の参加国は9ケ国参加しており、3グループに分かれて予選リーグを行い、上位2ケ国が準決勝トーナメントに進み、勝った国が決勝リーグに進み、準決勝トーナメントに負けた国は4～6位決定戦に回り、予選リーグ3位の国は7～9位決定戦に回るという順位決定方式をとられていた。日本は予選リーグCグループに入り、シリア、UAE（アラブ首長国連邦）との対戦となった。

　大会前日の深夜にホテルに入り、代表者会議にも出席できなかったため、出発前の不安が的中し、ホスト国のシリアとオープニングゲームが組まれていた。ここまで来てコンディション作りなどと言ってはおれず、選手たちにハッパをかけ、最悪のコンディションの中

ゲームが始まった。当然、レフェリングもシリア寄りであり、6人でゲームを進める時間が長かったが、後半残り30秒で逆転し、残り4秒で相手のフリースローからのシュートがゴールポストにあたり、サイドプレーヤーにボールを取られ5秒後にシュートを決められた。当然、オフィシャルもノーゴールと主張していたが、観客がコート内に入り込み大騒ぎになり、気がつけばシリアの得点にされ引き分けに終わった。日本チームはビデオで確認し、ＡＨＦに抗議文を提出して抗議をしたが、翌日には却下された。

不安が不信感となっていたが、大会は始まったばかりであり、選手たちには気持ちを切り換えるよう指示し、ＵＡＥ戦に臨んだ。ＵＡＥ戦は一進一退の中、選手たちの力で1点差で勝つ事ができ、後はシリアの結果待ちになったが、シリアがＵＡＥに敗れ、Ｃグループ1位で準決勝トーナメントに進む事が出来た。

大観集の中を入場する日本チーム

対戦相手はＢグループ2位のバーレーンに決まり、バーレーン対カタール戦を見た感じでは、日本チームが十分に勝てる相手と思ったが、1回もリードをすることなく敗れてしまった。

今、大会を通して感じた事は、中東諸国が確実に力をつけている点であり、組織だったプレーが目についた。日本がアジアでチャンピオンに成り得るためにも、計画性のある強化が大切であり、十分なトレーニングを積ませて大会に臨まなければ、当然アジアのチャンピオンには成り得ないと痛感して帰国した。

最後に国体前の大切な時期にジュニアチームのために貴重な時間や施設を提供していただいた大崎電気工業ならびにハンドボール部の皆様に誌面を借りて、心よりお礼申し上げます。

また、今大会が国体と同時期に開催され、選手及び国体関係の皆様には大変ご迷惑をおかけ致しました事を心よりお詫び申し上げます。今後共、ジュニア育成のためにご指導、ご協力の程、宜しくお願い申し上げます。

世界ジュニア・アジア予選結果

10/24	日	本22－22	シリア
10/25	日	本21－20	ＵＡＥ
10/27	日	本20－22	バーレーン
10/28	日	本29－26	ＵＡＥ
10/31	日	本30－37	韓国

(順位)①カタール②バーレーン③サウジアラビア④韓国⑤日本⑥ＵＡＥ⑦シリア⑧クウェート⑨中国

アジア男子ジュニア選手権に同行して

藤沢湘南台病院(整形外科)
木下　裕功

平成6年10月21日、成田発のルフトハンザ771便で、団長以下総勢21名が出発した。12時間でフランクフルトに、翌日4時間のフライトでダマスカスに到着した。さらにバスに揺られて4時間で試合会場のあるハマに到着した。ダマスカス空港とハマへの途中で夕食のために立ち寄ったドライブインのあまり良くない印象で落ちこんでいた自分には5つ星のホテルは輝いて見え、正直に言ってほっとしていた。

10月23日、日曜日。オープニングゲームは対シリア戦。観客はほぼ全員がシリア側であり、ハンドボールをほとんど知らない私にもひどいと思える審判をも敵にまわして、よくやっていた。勝っていたのに引き分け。大きな外傷はなし。

翌日、対ＵＡＥ戦。1点差勝ち。この日も大きな外傷はなし。

10月25日、ゲームはなし。右の足関節外側上方の腫れ、痛みで一人練習を休む。感冒で投薬。翌日もゲームはなし。

10月27日、3試合目。遠征に出て7日目。これまで無難にきていたが、緊張がとけたことと、アラブ料理の癖が強く日本人に食べら

れるものが限られており、どうしても偏りがちになることなどが重なったためか下痢、腹痛で二人が試合を欠場。そのほかにも下痢症状が何人かみられた。全体にあまり体調は良くないようで、勝てば1位から3位が決定するというゲームに敗れた。順位決定戦は1勝1敗で4位。

ドクターはひまな方がいいと団長さんに言われたが、最終的には医者としての仕事は結構多かった。医者の仕事は患者さんの来院から始まる。一般的に受身の仕事である。受身でなく、もう少し積極的にチェックしていたら選手の体調の悪化を早めにとらえられて対処できたかなと反省している。それにしてもアラブ料理は特殊であり、中東で行われる試合で結果を出すためには韓国チームのようにかなりの量の食材を用意していくのも一つの方法と思われた。

厳しい状況での試合、団長さん、監督さん、コーチ、選手の皆さん、ご苦労様でした。

アジア男子ジュニア選手権に参加して

國士館大学　岩本　裕

10月23日から31日まで、シリア・ダマスカス市で行われた第4回アジア男子ジュニア選手権大会（世界ジュニア予選）に参加して、私は自分の力を知り、そして世界の力も知った。大会前の大崎での直前合宿は、たった3日と、とても短い合宿ではあったが、日を追うごとに、代表らしいチームになっていった。

私たちの1回戦は、地元シリア戦となった。上の大会に行くためには、どうしても勝たなければいけない試合となった。シリアは決して強いチームではなかったし、私はシリアの選手よりも応援の声がすご過ぎ、精神面の部分で負けてしまい、引き分けという結果に終わった。

私は、この大会でアジアがどれほどの力を持っているのかを知るとともに、日本チームが世界に出て一歩もひけをとっていないと思うが、今のままではだめだと思った。これからの日本を変えるのは、気持ちだけだと思う。

そして、監督やコーチは、体力・技術面においてはさほど差がないと言われたが、体力やパワーの違いはとても大きかったし、技術でも外国の選手は、日本人にないすばらしいものを持っていた。私は、パワーにおいては大学に入学してから、パワーの違いに驚いていた自分だったが、世界のプレイヤーのあたりの強さは、大学以上のものがあり、ポストをやっていても、パスは取れても、シュートまで行けず、パワーに押えられ、力の大きさも感じたが、一番日本チームに欠けていたものは、やはり精神面だったと思う。なぜなら集中さえしていれば勝てた試合でも、精神面が弱かったため、良い結果が出なかった。試合中、一つのボールに対する集中力も他国と比べ、とても低いし、これからの練習で一からやり直し、少しでも世界に通用する選手になれるよう、毎日、努力を惜しまず頑張りたい。

アジア男子ジュニア選手権に参加して

日本体育大学　荒尾　祐治

アジア・ジュニア選手権に向けて、大崎電気で3日間の合宿を終え、チームの状態もベストとはいかずに、シリアに向けて緊張と不安の思いで日本を立ちました。十数時間にも及ぶ飛行機の移動は、全員が初めてで、時差の関係もあったせいか、シリアに着いたときは、疲れていた様子でした。

翌日、いよいよジュニア選手権が始まりました。開会式ではいろいろな国の人たちで賑い、驚かされました。そして、会場に応援に駆けつけたシリアの人たちは、日本をはじめ、このアジア・ジュニア選手権に参加した選手たちを歓迎してくれてとても気持ちが良かった。

開会式が終わり、第一試合である。日本対シリア戦は、初戦の試合で大声援の中、緊張のあまり自分たちの持っている力が出し切れず、引き分けという結果に終わり、とても悔いが残るゲームとなってしまいました。

次の試合、対UAE戦は、決勝リーグに上がれるかどうかの重要な試合だっただけに、とても気合いが入った試合で、勝つことが出来ました。

そして決勝リーグに出れることになった日本は、まずバーレーンでした。決して強いチームだったわけではなく、日本とよく似たレベルでしたが、油断とあせりから負けてしまいました。

今回のジュニア選手権に参加して、自分の精神力、体力の弱さ、技術不足など、まだまだアジアには通用せず、新たな課題が出来ましたが、ハンドボールを通して言葉も通じない他国の選手らと仲間になることが出来、良かったと思います。

第46回全日本総合選手権大会展望

男子　大同特殊鋼が二連覇に最短距離

女子　攻守のバランス取れたオムロン最有力

■男子

大同特殊鋼は、昨年の全日本総合選手権、先月のわかしゃち国体と地元開催の二大会を手中におさめた実力は見逃せない。先のアジア大会で活躍が目立った二人「ワザ師・末岡」と、パワーにテクニックを身につけた藤井の攻撃に注目する。攻守の中心である林珍錫とルーキー冨本（日本体育大出）のロングシュート、全日本メンバー入りして自信を持った「努力家・佐藤壮一郎」のポストプレーが加わり、〝フェニックス大同〟が全日本総合選手権二連覇に王手をかけている。

同じブロックで大同特殊鋼に待ったをかけられそうなのは、中村荷役である。着実にチーム造りの成果が出てきた中村荷役は、今大会の注目チームでもある。日本リーグ4年連続得点王を目指す呉龍基をはじめ、大型ルーキー木浪（国士舘大出）を獲得、韓国からスーパールーキー趙範衍を迎え、「指令塔」朴英大がどのような攻撃を仕掛けてくるかに注目したい。ディフェンスでは、左右に190センチ級をそろえ、全日本入りで自信をつけたゴールキーパー井上が安定している。攻守にわたり、メンバーが充実しており、準決勝進出で大同特殊鋼と対戦が予想される。

片方のブロックからは、本田技研と日新製鋼が勝ち進むと思う。本田技研の「守護神」橋本の守りは、年を追うごとに安定度を増している。高さとスピードを兼ね備え、攻撃的なディフェンスはゴールキーパー橋本がいて成り立つ。また今年は、ベテラン、中堅、若手とメンバーが充実しているのが強みである。満井、松原をはじめ2年目を迎える7選手が、山村らベテランと噛み合えば、昨年同様、決勝進出、そして優勝も可能である。

日新製鋼は、一昨年、昨年を頂点にやや調子を落とし始めた感じがする。堀田キャプテンをはじめ、ベテラン勢の得点力に頼るところが大きい。もっと源内や林が攻撃の中心となり、ゲームを引っ張るような展開で、得点出来なければ、今後ますます攻撃力が低下し、苦戦を強いられる。ディフェンス陣は、ゴールキーパー宇田川を中心に、野中、坂口とスペシャリストが揃っている。ベテラン勢の得点に、中堅・若手がどの位加点できるか、中堅クラスの活躍次第に、今大会の勝算がうかがえる。今、日新製鋼はメンバーの新旧交代時期に向かい、全日本総合選手権が今後を占う場となりそうである。

■女子

女子の安定度ナンバーワンは、オムロンである。比嘉、中山が抜けても橋本、張、石村、西村の堅いディフェンスと、互いに甲乙つけがたいゴールキーパー王、川島の完璧な守りは健在である。攻撃では古田、光井、鶴田の速攻トリオに、183センチの張は高さに加え、巧みなポストプレーで他チームから嫌がられている。比嘉の後を成長著しい高橋が、ゲームをコントロールするのに注目。昨年の全日本総合選手権では、準決勝でシャトレーゼに速攻を封じられ苦杯を飲まされた。

シャトレーゼは、オムロンとは対称的にセットでじっくり攻めて速攻のチャンスを与えなかった。昨年を教訓に、今年のオムロンは、得意の速攻に加え、セット攻撃を随所に展開して決勝へ進出すると思われる。

オムロンのブロックから勝ち進むと思われるのは、期待の両エース朴正林、白仁淑のいる大崎電気工業である。ロング、ミドルシュートを多様に連発すれば、二人で15点は確実に得点出来る。また、この二人と共に45度の若い広瀬が期待通りのゲームメークが出来るか注目する。ゴールキーパー出身の矢内監督らしく、堅いディフェンスを多様に使い分け、反撃を考慮したシフトをとるなどベンチワークも見所である。今大会、両エースで、大崎電気工業にとっては久々の優勝を狙うチャンスである。

もう一つのブロックでは、北国銀行、日立栃木をあげる。昨年は延長の末、1点差でシャトレーゼを下し、2年ぶり2度目の栄冠に輝いた北国銀行だが、エース白永蘭、金発英が抜けてやや得点力が気懸かりである。全日本総合選手権は、日本リーグと違い、連日のトーナメントになるため、若手中心のチームで攻撃のパターンが、全員速攻で途中もたつくと2連覇が危ぶまれる。たぶん松下の速攻による高得点が予想される。

日立栃木は安定感があり、準決勝まで勝ち上れるだろう。キャリアのある市来は、先のアジア大会で返り咲き、大活躍を演じた。市来がいたから中国に勝てたと思わせるようなプレーが随所に見られた。今年獲得した桐谷（日本体育大出）、王（中国・上海）は即戦力として出場チャンスがありそう。ロング、ミドル、ポストプレー、サイド、速攻とバラエティーな攻撃が出来、優勝のチャンスも十分にある。

執筆時（11月5日現在）、インカレと組み合わせが決定していないため、出場大学チーム名が書けないが、毎年女子では日本リーグ勢と延長や1点差の好ゲームで展開しているチームがある。今大会の女子は混戦模様で、大学勢にも大いにチャンスがある。第38回大会で東京女子大学が優勝して、話題を独占したことを懐かしく思い出すが、今年あたり、また紙面を賑すようなニュースを女子学生チームに期待している。

第10回ＡＨＦ総会開催される

第10回ＡＨＦ総会は10月1日、広島市内のホテルにてアジア大会前に開催された。日本から渡邊副会長、中澤専務理事、竹野国際担当常務理事が出席した。

参加国は日本を含め次の16ケ国が集まった。

バーレーン、バングラデシュ、中国、イラン、ヨルダン、カザフスタン、韓国、クウェート、マレーシア、パキスタン、カタール、サウジアラビア、中華台北、香港、インド、日本

新しいＡＨＦのメンバーに、カザフスタン、キルギスタン、トルクメニスタン、ウズベキスタン、マレーシアがＯＣＡ、ＩＨＦによって既に承認されていたが、今回のＡＨＦ会議によっても承認された。会議にはカザフスタン、マレーシアの2ケ国のみが出席した。

1995年から1996年の日程が話し合われ、次の様に決定した。

◇第3回アジア女子ジュニア選手権大会
（於：韓国　1994年）
95年ジュニア世界選手権大会予選を兼ねる

既に日本、韓国、中国が参加の意志表明。申込み時点で3ケ国がそのため参加資格を得た。

◇第8回アジア男子選手権大会
（於：クウェート　1995年9月）
アトランタオリンピック・アジア予選兼ねる

◇第5回アジア女子選手権大会
（於：韓国　1995年1～3月のいずれか）
アトランタ・オリンピック・アジア予選兼ねる

◇第5回男子ジュニア選手権大会
（於：インド　1996年7月または8月）立候補
ジュニア世界選手権大会兼ねる

◇第4回女子ジュニア選手権大会
（於：バングラデシュ　1996年7月または8月）立候補
ジュニア世界選手権大会兼ねる

◇第15回世界男子アジア予選大会
（於：未定　1996年9月）
熊本

◇第13回世界女子アジア予選大会
（於：未定　1996年9月）

◆次回、アトランタでのＡＨＦ総会（ＩＨＦの会議前に）
7月14日～18日

◆第14回男子世界選手権大会（於：アイスランド）のグループ分けについて
平成6年5月8日～21日、抽選が行なわれ下記に決定。
1位　韓国－Ａグループ
2位　クウェート－Ｂグループ
3位　（日本-サウジアラビアとの勝者）－Ｃグループ
補欠　4位中国、5位カタール

◆条文見直しの件
（バングラデシュ）
4条　ジュニアミニハンドボールについての規定を設けては？
↓次の理事会に渡す
8条　〝authority〟という語の正確な定義。
↓〝Policy-making〟という語をその前に付け加える。
9条　10条の番号ふり、特に〝first〟〝second〟というカテゴリーは不要。
↓訂正
（日本）
11条　ＡＨＦ副会長を4名に増やす件
↓現段階、Senior Vice President 1名とVive President 2名の計3名でいく。
（インド）
11条　理事会のメンバーを11名から12名に増やす件
↓否決（11名のまま）
（クウェート）
24条　クウェートは財政的にも苦しいので事情を汲み取ってほしい。但し運営規則には変更を加えない。
（中国）
24条1－4「友好試合」では利益をあげるのが困難なので、それを削除。
↓可決
25％は減らすべきである。
↓ＡＨＦの立場からすると25％はむしろ少なすぎるか。今のところ現状維持。

アジアハンドボール連盟加盟国は29ケ国に

ＯＣＡ加盟の国、地域43ケ国のうち13ケ国が未だ加盟していない。特に次のアジア大会の開催国であるタイが加盟していないので、今後ＯＣＡ・ＡＨＦ並びにタイ国にも働きかける運動を行なうことを10月の常務理事会でも申し合わせた。

加盟国29ケ国は次の通りとなっている。

▽バングラデシュ／バーレーン／中国／香港／インド／イラン／イラク／ヨルダン／日本／キルギスタン／韓国／サウジアラビア／クウェート／カザフスタン／レバノン／ネパール／オマーン／ウズベキスタン／パキスタン／パレスチナ／フィリピン／北朝鮮／カタール／シリア／トルクメニスタン／中華台北／アラブ首長国連邦／マレーシア／イエメン

第49回国民体育大会

成年男子１部決勝　広島選抜対愛知

「わかしゃち国体」を終えて

愛知県ハンドボール協会　村木　啓作

「いい汗キャッチ！生き生き愛知」を合言葉に第49回国民体育大会秋季大会ハンドボール競技会が、豊田市（成年女子・少年男子・少年女子）、知立市（成年男子１部）、三好町（成年男子２部）の２市１町を会場に10月30日から11月３日までの５日間、全国各ブロックの予選を勝ち抜いた80チーム、１０４０名の参加で開催されました。

30日はそれぞれの会場で種別の開始式が行われ、各市町の特色が十分に盛り込まれた集団演技が選手の前で披露され、和やかな雰囲気の中、しかし緊張感に満ちた開始式が無事終了。

引き続き各会場では１回戦の試合が開始された。第２日目（31日）には、成年男子１部の知立会場に常陸宮殿下をお迎えした。

各会場とも整備は十分整い、また地域の協力員の方々の心あふれるもてなし、早朝より会場周辺の清掃、輸送バスの手配等、よい条件のもとで充分なプレーが発揮出来るような心配り、本当に頭の下がる思いで一杯である。

前年度のリハーサル大会を皮切りとして、各種イベントで盛り上がりを図ってきた地元実行委員会の方々の献身的な努力には、この誌面をお借りして心より御礼を申し上げたい。

成年男子１部（知立市福祉体育館）

10チーム参加

体育館前正面には国体開催を記念して、地元ライオンズクラブから寄贈されたブロンズの像が選手を出迎えている。また体育館入口もフランターの花が見事に咲き誇っていた。休憩所には、地元のボランティアの方々の姿も多く、大会の盛り上がりに大きく寄与している。

さて、決勝に進出したのは国体５連覇を目指す日新・湧永連合の本命広島選抜と、地元の大声援を受け、どうしても勝ちたい大同特殊鋼。先取点は大同特殊鋼。前半12－11と大同特殊鋼がリード。後半も一進一退、残り３分、広島選抜が追いつき延長戦。延長に入り、大同特殊鋼の速攻でリードするが、どちらも譲らず、第２延長にもつれ込む。場内の興奮は最高潮。大歓声の中、残り２秒、大同特殊鋼・末岡の決勝ゴールで劇的な幕切れ。

7回目の優勝を地元で飾った大同特殊鋼チームに惜しみない拍手が成り止まなかった。

成年男子2部
（三好公園陸上競技場・三好公園総合体育館）

16チーム参加

2巡目国体の京都国体から実施された成年男子2部。第44回北海道国体を除き、開催県が優勝してきた。開催県の強化が最も図られてきた種別であり、前年の香川県の圧倒的な強さが今でも焼き付いている。

決勝に勝ち進んだのは、地元の大きな期待を一身に受け、大きなプレッシャーを背に、初戦こそ立ち上がり苦戦をしたが、その後は期待通り、危なげなく勝ち進んだ愛知選抜。一方のブロックからは、学生主体の全熊本。平均年令20才と若さあふれた好チーム。準決勝では同じく学生主体の石川選抜に競り勝ち進出。前半は優勝のプレッシャーのかかる愛知選抜に対し、全熊本の左右のロングシュートが効果的に決まり同点で終了。しかし、後半愛知の速攻が決まりはじめ、主導権を握った愛知の畳み掛ける攻撃。残りの10分間に6連続得点等、愛知の勢いは最後まで続き、試合終了。愛知選抜堂々の優勝。地元実行委員会の職員に胴上げも飛び出し、まさに地元と一体となった国体を目の当たりにし、感激の一瞬であった。

成年男子2部決勝　愛知対千葉

成年女子
（豊田市体育館前運動広場・豊田市体育館）

22チーム参加

成年女子の広島対山形戦

会場となった豊田市体育館、同体育館前運動広場は、昭和58年の高校総合体育大会の会場となったところであり、その後も日本リーグの誘致等で、ハンドボールの競技の普及が図られており、多くのハンドボール愛好者も増え、地元にも協会が設立され、今国体の競技運営に対しても万全の準備がなされてきた。

さて、決勝に進出してきたのは、地元の大声援を受けた愛知県ブラザー工業を準決勝で倒した熊本・オムロンと、一発勝負にあいかわらずの強さを発揮した三重・ジャスコ、前年と同じ顔合わせとなった。昨夜来の雨が残り観客の出足が心配されたが、会場はほぼ満員。前半は一進一退、しかしオムロン1点リードで終了。後半に入ってもオムロンは、ジャスコ土師に執拗なマンツーマン。後半23分には8点差として、勝負を手中にした。30日よりはじまった今国体の締め括りを飾るにふさわしい好ゲームで2年連続の優勝を果たした。

好天に恵まれた国体だった

第49回国民体育大会秋季大会ハンドボール競技成績一覧

種別	1位	2位	3位	4位	5位	5位	5位	5位
成年男子1部	愛知	広島	三重	埼玉	香川	福島	福井	京都
	大同特殊鋼	広島県選抜	本田技研	大崎電気	讃岐クラブ	福島クラブ	北陸電力	京都クラブ
成年男子2部	愛知	熊本	石川	千葉	青森	東京	宮城	三重
	愛知選抜	全熊本	石川選抜	千葉選抜	全青森	桜星ヴィーナス	全宮城	三重選抜
成年女子	熊本	三重	石川	愛知	大阪	栃木	福島	広島
	オムロン	ジャスコ	北国銀行	ブラザー工業	大和銀行	日立栃木	ムネカタ	広島イズミクラブ
少年男子	愛知	香川	大阪	石川	千葉	山口	神奈川	三重
	愛知選抜	香川選抜	大阪高校選抜	石川選抜	千葉選抜	山口県選抜	全神奈川	三重選抜
少年女子	愛知	京都	熊本	東京	茨城	兵庫	千葉	富山
	愛知選抜	京都選抜	熊本国府高	東京選抜	茨城選抜	兵庫選抜	千葉選抜	氷見高校

少年男子
（豊田市体育館前運動広場・豊田市体育館）

16チーム参加

左側ブロックは、大阪選抜を順当に破り選抜・インターハイ・国体と3大会優勝を目指す香川選抜が決勝に進出。

右側ブロックからは、地元で優勝を目指す愛知選抜が春からの強化が着実に実り、準々決勝では横浜商工で固めた全神奈川を前半立ち上がり、6連続得点と一気に畳み掛け、そのまま波に乗り、準決勝でも石川選抜を後半の15分からこれも6連続得点で振り切り決勝進出。香川は前半、所の7得点などの活躍で3点リード。しかし、後半の立ち上がり、愛知は得意の連続得点で同点に追いつき、けが人の出た香川を振り切り、大声援を背にそのままリードを保ち、優勝を果たした。

少年女子は愛知選抜が優勝

少年女子
（豊田市体育館前運動広場・豊田市体育館）

16チーム参加

地元テレビ局の放映が入るなか、ぞくぞくと詰めかける観客で場内は審判の笛もよく聞き取れないほどである。

決勝に進出したのは左側ブロックからは順当に洛北高校で固めた京都選抜と、接戦をものにして苦戦しながらも勝ち進んできた愛知選抜。

試合は愛知選抜の連続得点で立ち上がり4点。しかし京都選抜も会場の雰囲気に少しずつなれて、徐々に追いつくが、本来の調子からは遠い。しかしなんとか1点差で前半終了。後半も立ち上がり愛知の得点。しかし両チームとも決め手を欠き膠着状態が続く。21分から京都3連続得点で同点にする。しかしその直後、愛知選抜・竹上がサイドからの必死のシュートが決まり、この接戦の試合を手にした。愛知選抜は4年連続の優勝。

男女総合優勝は地元愛知県が4種別優勝の圧倒的高得点195点を獲得し、11回目の優勝を飾った。また女子総合優勝は熊本県が獲得した。

連載⑬

ハンドボールの指導法

ベンチワークについて

指導委員会委員長　大西　武三

今年の日本のハンドボール界にとって大イベントであったアジア大会は、男女ともに無事銀メダルを獲得し終了した。大会は参加国が少なかったものの、西アジアのクウェートやサウジアラビアの参加によって盛り上がりを見せた。男女とも好ゲームが多く、見る側にとってはゲームの面白さを十分に堪能できた。やはり親善試合と違って選手権はよいものである。

今回の指導法では、今大会で特にベンチワークについて考えるところがあったので、そのことについて書きたい。

見て面白かったベンチ

ゲームの観戦は、コートの中で行われるゲームそのものに向けられるのが一般的である。今回は、それに加えてベンチをも含めて観戦する対象になった。これはクウェートのイトウチェンコ氏やサウジアラビアのデロウアズ氏のベンチワークが非常にアクティブであり、見る者に十分なエンタテイメントを提供してくれたからである。

イトウチェンコ氏はハーフタイムでベンチを引き上げるとき、流れる額の汗を手でぬぐいながら私の前を通り過ぎていった。監督が選手と同じように汗を流している（写①）のを見るのは初めてのことである。このイトウチェンコ氏は機関誌でも以前書いたことがあるが、旧ソ連の監督であり、世界選手権やオリンピックで優勝経験がある監督である。実績で言えば世界のナンバーワン監督と言える。その監督がクウェートをどのように采配していくかは非常に興味があり、注目されていた。日本に勝ち、韓国に引き分けた時点では、優勝の可能性も十分で、さすがの感を持たせた。しかし、後のゲームでサウジアラビアや中国に敗れ、さすがの名監督もアラブのやんちゃな選手を短期間で御するのは難しいのだと思わされた。

写真①

サウジアラビアのデロウアズ氏は（写②）アルジェリアの元監督であり、アルジェディフェンスを作り出した人である。今回、アジア大会を盛り上げた要因の一つに、アルジェディフェンスという積極的なディフェンス法をゲームの大事な局面でしばしば使い成功し、観客を沸かせた。

ある人が「ベンチを見ているほうがおもしろい」と言っていたが、この二人は自分の感情や考えを行動として表現するのであるから、その心が第三者によくわかる。立ち上がり、選手の間を行き来し、指示し、激励し、怒るその大きなジェスチャーは一つのパフォーマンスであり、選手のプレイに劣らない「ゲームする人」でもあった。

ベンチの采配

本来、ベンチの采配は、監督としてのトレーニング過程の締め括りである。

ゲームに至るまでにやるべきことがいっぱいある。自分のチームの基本的な戦い方が出来るように、チームの戦術と個人の技術を鍛えなければならない。それと並行して、相手チームの戦力を分析し、如何に戦うか、作戦を立てなければならない。その作戦は自チームが持ついくつかの基本的な戦術をどのように実際のゲームで組み合わせ適用するか（一つしかなければそれをやるしかないが）、また人の使い方やフォーメーションを如何に使うか、あるいは特殊な戦術を別個に練習して如何に使うか

などである。（写③）

ゲームが始まれば、相手の状況を把握して、作戦がうまく適用しているかどうか確かめなければならない。予想通り上手く事が運べば特に指示を出すこともなく終ってしまうかも知れない。しかし、相手も作戦を仕掛けてくるのであり、なかなか上手くいくものではない。そのような時は、チームの戦術や人の使い方を工夫して作戦の変更を行わなければならない。

「彼を知り己を知れば、百戦危うからず」というのがあるが、このことは相手のことを十分分析し、それに対して自チームの技術的・戦術的な力が十分に上回るようにすれば負けることはないという事であろうが、そこに至るまでのトレーニングは生易しいものではないということを教えてくれている。

現実のベンチは

「彼を知り…」を実践するには、相当の能力、エネルギーと環境が必要である。それだけのものが整っているのは稀なことである。

自チームの完成度も相手の対策も十分でないままにゲームに臨んでいるのが普通の指導者ではなかろうか。

「相手のことはよく分からず、己の未熟さもよく知っていての話であるから、百戦とも危うい」という心境でベンチに入っている人も多いのではないでしょうか。作戦的なことも種々考えるが、忙しい世の中に振り回されて、それどころではない人も多いのが現実であろう。

ベンチのスタイル

サウジアラビアやクウェートの監督を見ていると、あれが一つのスタイルであると思う。相手に自分の意志を伝える方法にいろいろなものがある。日本人には以心伝心というものがあり、余り派手な行動でコミュニケーションをすることが苦手である。じっとしていても心や感情は大いに動いている。コミュニケーションは言葉と最小限の動作で行う。日本人の選手にサウジやクウェートの監督のような采配をやったらどうであろうか。大いに盛り上がるかも知れない。また怒るときはひどく怒るので、萎縮してしまうかも知れない。ただアラブの選手を管理するためには、あれぐらい強い言動を取らなければゲームは統率どころか分解の可能性十分である。あの派手とも思われる言動は、本人の性格もあろうが、彼らにとってはベンチにおけるコミュニケーションの技術・戦術・演技の一つとも言える。（写④）

写真②

写真③

写真④

写真⑤

国際ルールで数年前に「ベンチ規定」が出来たが、あちらではこのような規定を作らないと収拾がつかないことがしょっちゅう起こるのであろう。このアラブの監督の二人に限らず、チームの役員までがコートの中にしょっちゅう入ってくる。それに比べて、我々日本人のベンチはベンチ規定を持ち出されるまでもなくおとなしい。日本人の性格から前二者のようなベンチを我々にしろと言っても出来るものではないが、見る側に立てば、これからはもっともっとアクティブな言動で選手とのコミュニケーションを取る監督が出てきていいと思う。

ゲームのコントロール

ゲームに対する二つの考え方がある。一つはゲームは選手がやるものであるという考え。従ってゲ

ームは作品の発表の場であり、指導者はそれを見守るというもの。もう一つはゲームはベンチがゲームに介入して、指導者と選手が共にゲームを作り上げようとする考えである。指導者はゲームの指揮官となり、率先してゲームをコントロールする。前者に比べて同じ選手なら高いレベルのゲームが出来ると考えられる。勿論、前者もただ見守るだけではないが、後者に比べれば消極的ベンチといえ、戦術・作戦的には選手レベルのものしか出来ない。

日本の場合、スポーツが教育の手段として用いられてきたことから、前者のスタイルを取ることが多い。後者はゲームの中で即応的に作戦を実行したり、選手を頻繁に交代させ、揺さぶりをかけたりして「ゲームの中でゲームを作っていく」と言う感じが強い。（写⑤）この場合、それ相当の監督としての準備が必要であるが、スポーツによってそれがやりやすいスポーツとそうでないスポーツがある。野球はゲームの性質上、ベンチがもっとも介入しやすい。アメリカ育ちのスポーツは、作戦タイムを導入するなどベンチも介入して総力で面白いゲームを作り上げるように出来ている。それに対してヨーロッパ系のハンドボールにしてもサッカーやラグビーにしても作戦タイムはない。スポーツは選手が主体でやるようになっている。それがベンチワークを疎かにしてきたのかも知れない。もし勝ちたいとすれば、監督がベンチワークによって選手の経験不足を補い、ゲームをコントロールするかは大きな問題である。

オリンピック・ソリダリティで来日したデンマークのルント氏が言っていた。「私がサッカーからハンドボールに移った理由は、サッカーはコートが広くて選手とのコミュニケーションが出来ない。ハンドボールは小さくてそれが可能である。監督の力量を大いに発揮出来る」

ベンチの采配はハンドボールでは勝敗に影響する。ハンドボールならではの采配の方法を確立していくことが望まれる。

ベンチの切り札

ベンチからの指示がゲームをひっくり返すということがよくある。勝てると思っていた試合が、相手の作戦によってひっくり返されることもある。仕掛けられた作戦に応じる作戦がなく、手をこまねいているうちに敗れてしまうこともよくあるらしい。外から見ていて「あれはベンチの差だな」と思うことがよくある。（写⑥）

勝っていた流れが急に変わって相手のペースとなり、何とかしなければならない。残りの攻撃回数からしてこのままでは負けてしまう、などゲームの流れの中で監督として何か手を打たなければこのまま負けてしまう状況がよくある。このような時、勝負師的な勝てる監督というのは何か切り札を持っているものである。精神的な頑張りを求めるだけではなく、技術的なあるいは戦術的な切り札を出してくる。勝負を求めるなら、この切り札を如何に持ちえるかが監督としての力量でもある。

選手の士気を高める

ゲームはその時どきの、選手のやる気、気迫の持ち様で随分と違った結果が生まれる。指導者は、技術的な、戦術的な切り札だけでなく、日頃やってきたことを高いレベルで発揮させるような精神状況を作り上げることが何よりも大事なことである。そのためには指導者はベンチでどのように振る舞えばよいのであろうか。（写⑦）

日本的な考えでは、試合に臨むその選手のそこに至るまでの取り組みの姿勢によって、それは決まってくるものであり、試合でどうのこうの問題ではないとするものもある。しかし、選手というのは、そう完成された人間ではない。未熟な段階ではやはり激励、助言等の言動によって選手の士気を高めていくということは大切である。ベンチで大いに激励し、コミュニケーションしてもらいたい。

写真⑥

写真⑦

アンケート結果の報告

日本ハンドボール協会は、評議員会の提案による「褒賞金制度」の検討の一環として、都道府県ハンドボール協会会長に対して「全日本選手に対する褒賞金制度について」のアンケートを実施しました。また、ビジョンづくりのための一環として都道府県ハンドボール協会理事長に対して「ハンドボール競技の21世紀へ向けての活性化について」のアンケート調査を実施いたしました。今回は誌面の関係から一部抜粋して結果を報告いたします。次回に具体的なご意見、ご提案を掲載いたします。

A 全日本選手に対する褒賞金制度についてのアンケートについて（報告）

・回答を寄せていただいた都道府県

回収 29（61・7％）

北海道・青森・岩手・宮城・山形・茨城・栃木・群馬・埼玉・長野・富山・石川・静岡・愛知・三重・岐阜・京都・奈良・和歌山・鳥取・島根・岡山・広島・香川・福岡・長崎・熊本・大分・宮崎

1 全日本選手に褒賞金を出すことに賛成ですか、反対ですか

①賛成 17／58・6％
②条件付きで賛成 6／20・7％
③反対 4／18・8％
④わからない 1／3・4％

5 褒賞金を出すとしたらどの程度の選手権でどの程度の成績が適当と考えますか

①広島アジア大会
第1位 10／34・5％
②世界選手権第二次予選
出場権獲得 3／10・3％
③アトランタオリンピック予選
出場権獲得 9／31・0％
④アトランタオリンピック本大会
第3位＝6／20・7％ 第4位＝2／6・9％ 第6位＝2／6・9％ 第8位＝5／17・2％
⑤世界選手権本大会
第3位＝6／20・7％ 第4位＝1／3・4％ 第6位＝1／3・4％ 第8位＝3／10・8％

6 褒賞金の額はどの程度が適当だと思いますか

10万円＝0 30万円＝2／6・9％ 50万円＝5／17・2％ 100万円＝9／31・0％
その他、アジア30万円、オリンピック8位50万円、オリンピック1位100万円

11 褒賞金の原資はどのように捻出するべきだと考えますか

①地方協会が均等分担する 1／3・4％
②地方協会が何らかの割合で応分分担する 6／20・7％
③一般から募金をする
④ハンドボール関係企業から募金をする 11／37・9％
⑤一般企業から募金をする 15／51・7％
⑥日本協会が借財をして捻出する 14／48・3％ 2／13・8％
⑦その他の方法がありましたらお書きください 4／13・8％

B ハンドボール競技の21世紀へ向けての活性化アンケートについて（報告）

・回答を寄せていただいた都道府県

回収 39（80・9％）

北海道・青森・岩手・宮城・秋田・山形・福島・茨城・栃木・埼玉・千葉・東京・長野・新潟・富山・石川・福井・静岡・愛知・岐阜・滋賀・京都・大阪・兵庫・鳥取・島根・岡山・広島・山口・香川・徳島・愛媛・高知・福岡・佐賀・長崎・大分・宮崎

◇財務関係について

質問1 増収の方策について伺います

①登録金の値上げ 9／23・7％
②日本リーグの開催権料の値上げ 5／13・2％
③日本協会の組織に事業部を設置する 21／55・3％
④都道府県協会から一定額の基金を寄付する 1／2・6％
⑤賛助会員の拡大をはかる 16／42・1％
⑥わからない 3／5・3％

◇普及関係について

質問11 日本リーグチームの国体参加チームについて伺います

①現行のままでよい 5／13・2％
②日本リーグ1部チームは参加するべきでない 3／7・9％
③日本リーグチームは全て参加するべきでない 25／65・8％
④わからない 2／5・3％

質問12 現行の競技大会（総合、インターハイ、実業団、教職員、クラブ、全中、JOCカップ、国体、インカレ、高校選抜他）について伺います

①現行のままでよい 12／31・6％
②検討が必要である 18／47・4％
③大会の新設が必要である 3／7・9％
④大会の廃止が求められる 2／5・3％
⑤わからない 1／2・6％

◇指導関係について

質問15 指導者育成について伺います

①現状に満足である 1／2・6％
②現状に不満足である 25／65・8％
③わからない 9／23・7％

質問16 公認指導者制度について伺います（3つ以内）

①現状に満足である 4／10・5％
②資格を取っても活かす機会がない 21／55・3％
③資格を取りたい（取らせたい）が機会（時間）がない 13／34・2％
④資格は無意味である 4／10・5％
⑤指導者の経験主義から脱皮するためにも必要である 10／26・3％
⑥わからない 2／5・3％

質問18　指導者の研修について伺います（○印は3つ以内）

①現状に満足である　0
②指導者は研修すべきであると思う　32／84・2％
③指導者の多くは経験で指導をしていると思う　15／39・5％
④指導者は科学的知識の習得に努めるべきである　24／63・2％
⑤現在の指導者の多くはコーチング理論に疎いと思う　13／34・2％
⑥現在の指導者の多くはコーチング理論に精通していると思う　0
⑦指導者は研修しなくても良い　0

◇審判関係について

質問21　日本のレフェリーに関して伺います（○印は5つ以内）

①地域による判定がバラツキ大きすぎる　26／68・4％
②判定のバラツキは個人差である　10／26・3％
③レフェリーは質が悪すぎる　4／10・5％
④競技経験が少ないので適正な判定ができない　4／10・5％
⑤日頃の競技の経験が少なすぎる　3／7・9％
⑥日頃の判定のトレーニングが不足である　17／44・7％
⑦向上心が感じられない　5／15・8％
⑧レフェリーの技術向上をする環境がない　16／42・1％
⑨大会運営にレフェリーの経費が占める割合が多い　4／10・5％
⑩レフェリーの資格審査を厳格にするべきである　9／23・7％
⑪レフェリーの評価を厳格にするべきである　13／34・2％
⑫多くのレフェリーは公平である　8／21・0％
⑬多くのレフェリーは公平でない　3／7・9％
⑭多くのレフェリーは試合による選手の能力に応じたレフェリングができない　13／34・2％
⑮多くのレフェリーは適格だと思う　3／7・9％
⑯多くのレフェリーは不適格だと思う　1／2・6％
⑰日本リーグのレフェリーは現状のままでよい　3／7・9％
⑱日本リーグのレフェリーは少数精鋭とすべきである　7／18・4％

◇強化関係について

質問29　全日本チームスタッフに外国人を導入することについて伺います。該当する項目に○印をつけ、その理由を下欄のご意見、ご提案に具体的にお書きください。

①賛成であり、早急に対処すべきである　11／28・9％
②賛成であるが、人選の検討を要する　18／47・4％
③条件付きで賛成である　3／7・9％
④反対である　1／2・6％
⑤わからない　5／13・2％

◇日本リーグ関係について

質問32　現在、日本リーグはホームアンドアウェイ方式を進めています。開催について伺います。該当する項目に○印をつけ、その理由を下欄のご意見、ご提言に具体的にお書きください。

(1)　日本リーグ所属チームを持っておられる都道府県の方へ伺います。　N＝11

①ホームアンドウェイ方式を歓迎する　4／10・5％
②運営負担が大きすぎる　6／15・8％
　イ　人材面　ロ　経営面
　ハ　会場確保面

(2)　日本リーグ所属チームを持っておられない都道府県の方へ伺います。　N＝20

①経費の一部を負担しても希望すれば開催させて欲しい　10／26・3％
②経費負担してまで開催したくない　7／18・4％

◇機関誌関係について

質問35　機関誌の変化についてお伺いします。該当すると思う項目に○印を付けて下さい。

①機関誌は良い方向に変化している　18／47・4％
②変わらない　14／36・8％
③わからない　1／2・6％

◇国際関係について

質問37　日本協会は毎年国際試合を開催したいと思っています。国際試合を日本で行う場合、あなたの都道府県で主管していただけますか？

①はい　5／13・2％
②試合のレベルによる　10／26・3％
③いいえ　3／7・9％
④どちらともいえない　12／31・6％
⑤わからない　4／10・5％

「競技規則必携」
頒布中！

1993年のルール改正に伴い、競技規則の解説書（競技規則必携）が出来上がり、頒布中です。

各都道府県単位でまとめて日本協会にお申し込みください。頒布価格は1,100円です。

広島アジア大会を顧みて

メディカルサポートの立場から

日本ハンドボール協会スポーツドクター
加藤　公

平成6年10月、第12回広島アジア大会ハンドボール競技が実施された。競技は男子5カ国、女子4カ国のリーグ戦方式で実施された。日本チームは男女とも、宿敵韓国の高い壁にまたもや屈し、銀メダルにとどまった。

試合会場の雰囲気が盛り上がりを見せたなかで、我々チームドクター群から、チームの帯同ドクター以外の数名が会場に駆けつけ、選手の活躍を観戦かつ控室で激励した。試合中は日本チームのシーソーゲームに胃の痛くなる思いもしたり、選手がコンタクトプレーで倒れ込んだりすると、ドキッとして思わず身を乗り出してしまうし、傷害から大会直前に復帰したばかりの選手が活躍した時などは、非常な喜びを感じもした。

今大会の選手のコンディションについては、慢性的傷害をもった選手が数名いたのに加え、大会直前に肩鎖関節亜脱臼、肉離れなどの傷害が新たに発生してしまった。何とか大会に間に合ったが、万全の状態とはいえず、傷害を受けた選手の気持ちやチームの状況を考えると、今のままのサポートの仕方で良いのだろうかと反省させられた（治療した選手がシュートを決めたなどと喜んでいる場合か、と）。

現在、ドクター群がナショナルチームに帯同して行っているメディカルサポートの主体は、傷害状態を説明して、治療やリハビリ、スポーツ活動復帰などを指示・指導することである。

それで、選手たちは怪我をしてもドクターがいるから安心と思っていると思う。しかし、ドクター群の役割は、選手の傷害を治すためにベストを尽くすのみでなく、更に一歩進んで傷害を未然に防ぐ過程（予防）での努力が必要であろう。

ハンドボール競技は、コンタクトスポーツであるので、全部の傷害を未然に防ぐことは不可能であろう。少しでも傷害を軽度に止める方法すなわち、傷害予防のための体力づくりや傷害回復のためのリハビリテーション段階での更なる協力が必要となろう。個人別運動処方がすでに本誌No.336〜346に河野、坂本、田中、石山等によって報告され、既にメディカルチェックの結果とともに各選手のフィードバックが定着されつつあるので可能でもある。

しかしながら、更に積極的な選手管理のためには、

①選手個々の筋力と傷害との分析結果から、個々の弱点を強化・改善することにより、新たな傷害の発生を防止すること。

②従来から日本選手に不足しているスタミナやパワーの向上策を明確に示し、生活習慣のなかで自己努力として定着させること。

これらを目的としたメディカルサポートの重要性を再認識した。

以上の活動を進めるためには、ドクター群個々がばらばらでは、かえって選手に混乱を招くので、足並みを揃える必要があろう。

スポーツ医科学委員会で提唱された内容を各メディカルスタッフ（スポーツドクター、トレーニングドクター、トレーナー）が把握した上で常時帯同し、申し送りしていくことはもちろん、コーチングスタッフや強化委員会などと十分な話し合いができる機会をもつことが必要ではないか。そうなって初めて我々は、選手の怪我を診る付き添いの医師の範疇から脱皮し、選手やスタッフの精神的な支えとしてのチームドクター・トレーナーとなり得るのではなかろうか。

以上の体制化のための問題点を列挙する。

①ドクター群は各病院に勤務しているので、病院側の理解と協力なしには十分なメディカルサポートは行えない。現況では、病院やドクター・トレーナー個々の環境条件によって必ずしも一定のサポート状況ではない。

②年間計画で帯同ドクター群の海外競技会や国内合宿のサポート要請は行ってはいるものの、不確定の行事日程で兎に角変更が多い。

③経費面では、本年度から試行された病院単位での契約は僅か2拠点に過ぎない（望ましくは5拠点）。

以上の3点が改善されれば、活動しやすくなり、かつ活動内容も改善されてこよう。

幸い現状は協力病院が関東地区（横浜市港湾病院、代々木コンディショニングセンター）、近畿・東海地区（鈴鹿回生病院）、関西地区（濱脇病院）と地域的に拠点病院として機能しているので、現在のメディカルサポートのスタッフで、アトランタ・オリンピック大会アジア地区予選（1995年9月・クウェート）までの1年間を着実なコンディショニングに徹していきたい。

（監修：スポーツ医科学委員長　西山逸成）

NHKテレビ「スポーツ教室」のお知らせ

平成7年1月14日（予定）
指導　蒲生晴明氏（全日本男子監督）

フリースロー

「ガッツポーズのタイミング」

企画・広報委員　早川　文司

広島アジア大会で男女とも銀メダルを獲得したのはご存じの通り。私も運営要員の一人として参加し、"出場"の喜びを肌で感じさせてもらったが、今回ほどハンドボール人気にびっくりしたことはない。というのも、チケット発売の何時間も前から行列ができ、多い時は三百人もの人が開幕を待つほどだった。選手のハッスルプレーが共感を呼んだ結果だろうし、運営に携わった人々の努力のたまものと言っていいだろう。こういった光景が今後も続くことを願わずにはいられない。

ところで、年寄りの戯言と聞き流してもらってもいいが、気になったことが一つある。それは今はどの競技でも目につくガッツポーズなどのパフォーマンスだ。サッカーではイタリアに渡ったカズ（三浦知良）のカズ・ダンスが有名だが、ハンドボールでも随所にパフォーマンスが飛び出す。

気になるのは、そのタイミングなのだ。なんでもかんでもゴールを決めるたびに、大きく両手をかざしこぶしを突き上げたり、スタンドに向かって手を振るポーズには、ちょっと疑問を感じる。逆転された後とか、大量リードされている時などに、そんなパフォーマンスをやられたのではたまったものではない。物事にはタイミングというものがあるはずである。

決して「するな」と言っているのではない。ここという場面でのパフォーマンスは、ファンの共感を呼ぶし、チームの勢い・エネルギーを倍加させるのは確かである。貴重なゴールを決めた後の、両手のこぶしをキュッと抱える姿はカッコいい。そんなパフォーマンスができないものかと言っているのだ。

また、ある時はスタンドに向かって投げキッスまで登場した。声援に応え、自分の気持ちを盛り上げたいことも理解できる。これもタイミングだ。空回りしたのでは意味がない。

（財）日本ハンドボール協会編
『ハンドボール』
第三四八号
昭和四十年六月七日 第三種郵便物認可
平成六年十一月二十六日 印刷
平成六年十二月一日 発行
東京都渋谷区神南一－一－一
電話 代表 三四八一－二三六一
振替 〇〇一二〇－七－一〇二九三
編集兼発行人 中澤重夫
定価三百五十円